

# 泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅷ

泉南市文化財調査報告書 第二十二集

1991. 3

泉南市教育委員会



# 序 文

大阪府南部地域は、急増する開発の波に洗われ埋蔵文化財の発掘調査も年々増加しております。しかも、開発の多様化にともない調査規模・内容も拡大・多様化の傾向にあります。

しかし、このような状況下でも、調査が増加し拡大することによって幸か不幸か、多くの歴史資料が日の目をみ、市域の歴史はその豊饒な姿を私たち現代人の前にあらわそうとしています。

私たちは、豊かな歴史を持つ郷土を誇りに思い、親しみ、そこから多くのことを学び新しい未来を築いてゆきます。このとき、貴重な先人の資産を代償にして得られたものが多く含まれていることを忘れずにいたいものです。

当市は今年度で市制施行20周年を迎え、新たな歴史の1ページを開くこととなりました。これまで本市の文化財保護行政を暖かく見守ってくださった皆様方に、重ねて篤くお礼申し上げるとともに、迎えようとする時代への決意を新たなものにしたいと思います。

平成 3 年 3 月

泉南市教育委員会

教育長 山 田 静 也

## 例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が平成2年度国庫補助事業として計画し、社会教育課が担当、実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会社会教育課、仮屋喜一郎・岡田直樹を担当者として、平成2年4月1日着手し、平成3年3月30日終了した。
3. 調査及び整理の実施にあたっては、神沢かずみ、田上信一、幸前和裕、塚越知子、荒野陽子、鍛冶知子、松下徹、梶本太昭、乾康明、愛洲みさ子、阿波屋昌樹、石塚律子、岩橋良典、上野彰子、上野友紀代、氏田英利、小井清二、大谷周平、大西芳、大家優昭、川野美貴、金山睦美、城戸久恵、木下義隆、久世佐紀子、久保真理、小林幸二、坂本直子、佐農程子、城野恵美子、杉山幸一、瀬戸晴美、竹内啓子、武智陽子、角岡奈緒美、中澤利香、中澤竜二、沼田広子、日垣愛、平井直樹、平野伸一、藤井弘章、堀田昌代、松本恵子、南理津子、易本九栄、山本紀子諸氏の協力を得た。  
また、広瀬和雄、芝野圭之助、森屋直樹、土井孝之、鈴木陽一、三好義三、山田幸弘、向井俊生諸氏からも有益な助言・協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
4. 本書の執筆は第2章第4節を仮屋が、他は全て岡田があたり、編集は仮屋がおこなった。
5. 出土遺物の写真撮影については、岡田があたった。
6. 本調査にあたっては、写真・スライド等を作成した。広く利用されることを望むものである。

## 凡 例

1. 各調査区には個別の番号をつけている。番号の基本構成は「遺跡名称（記号）－年度－通し番号」である。遺跡の略称は、男里遺跡－ON、幡代遺跡－HT、岡中遺跡－OK、岡中西遺跡－OKW、岡田遺跡－OKD、である。調査年度をあらわす場合、元号年度は西暦年度に読み替え、上位2桁を省略して表現した。なお、本報告書において調査報告は遺跡別に章ごとにまとめているため、基本的に遺跡名称を省略している。
2. 図中の方位は基本的に磁北をあらわしている。ただし、挿図第3・6・7図、および図版PL.1・2では真北を表示している。
3. 本文および図版中に示したレベル高は、すべてT.P.+値(m)である。なお、絶対高の移動はそれぞれ次の水準点から行った。男里・幡代遺跡は大阪府一級水準点466号、岡田遺跡は建設省国土地理院水準点262号、岡中・岡中西遺跡は同263号である。
4. 遺構名称はアルファベットと任意の数列の組合せで表している。アルファベットはSD－溝、SK－土坑、SX－性格不明遺構、Pit－柱穴をそれぞれ表す。
5. 本文挿図に掲載した遺物の番号は通し番号とした。
6. 遺物実測図版には区別しやすいよう各種のトーンを利用している。  
断面は、須恵器－黒塗り、縄文土器・弥生土器・土師器・陶器・磁器－白抜き、瓦器・瓦質土器－トーンのように塗り分けた。
7. 遺物実測図版と写真図版では、遺物番号は統一している。
8. 第5表とPL.1の番号は一致させた。
9. 遺物の出土量などをあらわすのに用いたコンテナは、内容積約27.5ℓのものである。

# 目 次

第1章 調査の経過 .....	1
第2章 男里遺跡の調査 .....	6
第1節 既往の調査 .....	6
第2節 90-1区の調査 .....	8
第3節 90-2区の調査 .....	9
第4節 90-3区の調査 .....	10
第5節 90-4区の調査 .....	12
第6節 90-5区の調査 .....	14
第7節 90-6区の調査 .....	15
第8節 90-7区の調査 .....	15
第3章 幡代遺跡の調査 .....	18
第1節 既往の調査 .....	18
第2節 90-1区の調査 .....	19
第3節 90-2区の調査 .....	23
第4章 岡中遺跡の調査 .....	25
第1節 既往の調査 .....	25
第2節 90-1区の調査 .....	26
第3節 90-2区の調査 .....	27
第4節 89-3区の調査 .....	28
第5節 89-4区の調査 .....	28
第5章 岡中西遺跡の調査 .....	30
第1節 既往の調査 .....	30
第2節 90-1区の調査 .....	30
第6章 岡田遺跡の調査 .....	32
第1節 既往の調査 .....	32
第2節 90-1区の調査 .....	32
第7章 まとめ .....	34

## 挿 図 目 次

第 1 図	男里遺跡 90-1・3 区出土の遺物	8
第 2 図	男里遺跡 90-4・7 区出土の遺物	13
第 3 図	幡代遺跡調査区位置図	19
第 4 図	幡代遺跡 90-1 区出土の土器	21
第 5 図	幡代遺跡 90-1 区出土の平瓦	22
第 6 図	岡中・岡中西遺跡調査区位置図	26
第 7 図	岡田遺跡調査区位置図	33

## 表 目 次

第 1 表	発掘および試掘届出一覧表	2
第 2 表	発掘調査一覧表	3
第 3 表	試掘調査一覧表	4
第 4 表	立会調査一覧表	5
第 5 表	文化財一覧表	37

## 図 版 目 次

PL. 1	泉南地域の文化財
PL. 2	男里遺跡調査区位置図
PL. 3	男里遺跡調査区
PL. 4	男里遺跡 90-7 区遺構図および断面図①
PL. 5	男里遺跡 90-7 区遺構図および断面図②
PL. 6	幡代・岡中・岡中西・岡田遺跡調査区
PL. 7	遺跡の周辺

- PL. 8 男里遺跡 90-1・2 区
- PL. 9 男里遺跡 90-3・4 区
- PL. 10 男里遺跡 90-5・6 区
- PL. 11 男里遺跡 90-7 区①
- PL. 12 男里遺跡 90-7 区②
- PL. 13 幡代遺跡 90-1・2 区
- PL. 14 岡中遺跡 90-1・2 区
- PL. 15 岡中遺跡 89-3・4 区
- PL. 16 岡中西遺跡 90-1 区・岡田遺跡 90-1 区
- PL. 17 男里遺跡出土の遺物
- PL. 18 男里遺跡・幡代遺跡出土の遺物
- PL. 19 幡代遺跡 90-1 区出土の平瓦



# 泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅷ

## 第1章 調査の経過

現在泉州では関西国際空港設置にとまなう関連諸事業が展開されている。このことがこの地域に「新たな将来性」を与え、人口移動・第三次産業の多数進出の一要因となっていることは周知の事実である。これらの官民による土地買収により、移住・建物移転を余儀なくされたため、個人専用住宅の新築増加も近年めざましい。また、公の道路新設に伴い、予定地に隣接した区域への専用住宅建設も増加の一途をたどっている。

このような状況はもちろん泉南市域でも例外ではなく、ここ数年調査件数は急増を重ねている。今年度は2月末までに文化財保護法にもとづく発掘届出及び通知が64件提出されており、先年度を上回る勢いで調査数は増加している。

今年度行われた調査概要を、以下に示す。

男里遺跡では本年度、土木工事等に伴う発掘調査を12件おこなった。これらの調査では、古代から中世にいたるまで、遺構・遺物・包含層を確認した他、あらたに縄文土器の分布範囲拡大や、男里川旧河道の一部とその埋没時期を確認するなど、これまでの成果に加え、さらに詳細な情報を収集することができた。

平安後期から中近世にいたる複合遺跡、幡代遺跡では今年度、2件の発掘調査をおこなった。ここでは、中近世を中心とする遺構群を確認でき、当遺跡内での中世集落の内容の一部を垣間見ることができた。

金熊寺川が形成した広い氾濫原上にひろがる岡中遺跡では、これまでに平安後期に緒を発する寺院跡や14・5世紀の土坑墓群などが確認されている。市域の中世を語るには忘れてはならない遺跡である。当遺跡では本年度は2件の発掘調査を行い、遺跡の範囲を知る上で重要な包含層の広がり確認された。

岡中遺跡の対岸、金熊寺川左岸に展開する岡中西遺跡では、今年度1件の発

掘調査が行われた。ここでは削平された丘陵尾根の痕跡が確認され、遺跡の西限を知る手がかりとなった。

岡田遺跡は発見されてから日が浅いが、最近の調査では、中世を中心とし、近世に至るまでの中世遺物包含層が確認されている。今年度は3件の発掘調査が行われ、新たに古代須恵器や弥生時代石鏃の出土を確認している。新規発見から数年後、弥生から中近世にいたる複合遺跡であることが確認された。

以上の各遺跡における調査区、位置、申請者、規模、用途、調査年月は第2表に示したとおりである。

第1表 平成2年度発掘および試掘調査届出一覧表

平成3年2月28日現在

年 月	発 掘		試 掘		合 計	
	件数	面積 (㎡)	件数	面積 (㎡)	件数	面積 (㎡)
2年・3	2	12,348.61	2	5,234.91	4	17,583.52
4	—	—	2	2,044.31	2	2,044.31
5	6	2,463.84	7	6,685.26	13	9,149.1
6	7	5,211.9	2	8,074.45	9	13,286.35
7	4	29,311.1	3	2,902.32	7	32,213.42
8	5	30,406.42	4	2,161.13	9	32,567.55
9	1	83.09	1	831.65	2	914.74
10	7	3,252.9	5	3,766.88	12	7,019.78
11	7	17,950.56	3	2,469.7	10	20,420.26
12	10	2,308.33	1	8,465.9	11	10,774.23
3年・1	5	1,277.85	3	34,925.37	8	36,203.22
2	10	2,962.23	2	4,773.44	12	7,735.67
合 計	64	107,576.83	35	82,335.32	99	189,912.12

## 第2表 発掘調査一覧表

平成3年2月28日現在

No.	遺跡名	地区名	位 置	申請者	面積㎡	用 途	調査年月	備 考
1	男里遺跡	90-1区	男里		1,008.52	住宅新築	2年7月	本書掲載
2	男里遺跡	90-2区	男里		462.68	住宅新築	2年8月	同上
3	男里遺跡	90-3区	男里		1,177.74	車庫新築	2年6月	同上
4	男里遺跡	90-4区	男里		299.04	個人用倉庫新築	2年9月 ～10月	同上
5	男里遺跡	90-5区	信達牧野		330.68	住宅新築	2年7月	同上
6	男里遺跡	90-6区	信達牧野		88.09	倉庫新築	2年10月	同上
7	男里遺跡	90-7区	馬場		1,931.52	倉庫新築	2年10月 ～11月	同上
8	男里遺跡	90-8区	男里		172.74	住宅新築	3年1月	現在整理中
9	男里遺跡	90-9区	男里		70	水路改修	2年12月～ 3年1月	別書掲載
10	男里遺跡	90-10区	馬場		4,239.28	宅地造成	2年8月 ～9月	同上
11	男里遺跡	90-11区	男里		113.26	住宅新築	3年2月	現在整理中
12	男里遺跡	90-12区	男里		356.80	住宅新築	3年2月	同上
13	幡代遺跡	90-1区	幡代		335.90	住宅新築	2年7月	本書掲載
14	幡代遺跡	90-2区	幡代		620.85	住宅新築	2年11月	同上
15	岡中遺跡	90-1区	信達岡中		432.26	住宅新築	2年9月	同上
16	岡中遺跡	90-2区	信達岡中		287.595	住宅新築	2年4月	同上
17	岡中遺跡	89-3区	信達岡中		580.52	住宅新築	2年2月	同上
18	岡中遺跡	89-4区	信達岡中		528.26	住宅新築	2年2月	同上
19	岡中西遺跡	90-1区	信達岡中		445.21	住宅新築	2年5月	同上
20	岡田遺跡	90-1区	岡田		602.44	住宅新築	2年7月	同上
21	岡田遺跡	90-2区	岡田		122.32	住宅新築	3年1月	現在整理中
22	岡田遺跡	90-3区	岡田		351.58	住宅新築	3年2月	同上
23	キレット遺跡	90-1区	男里		16,948.75	共同住宅新築	2年6月	遺物包含層はごく一部に確認できるが、大半は既存建物によりほとんど破壊されていた。
24	戎畑遺跡	90-1区	男里		616.58	共同住宅新築	2年11月	トレンチを1カ所設定。遺構・遺物は確認できなかった。
25	高田遺跡	90-1区	男里		1,150	共同住宅新築	3年2月	トレンチを5カ所設定。初めて遺物包含層を確認。弥生・古墳・奈良時代の遺物が出土。遺構なし。

### 第3表 試掘調査一覧表

平成8年2月28日現在

No.	遺跡名	位 置	申 請 者	面 積 (㎡)	用 途	調 査 年 月	備 考
1	範囲外	信達市場		1,271.65	共同住宅	2年4月12日	トレンチを2カ所設定した。池の一部を確認し、地山を削りだした堤体の一部を確認。遺物は確認できなかった。
2	範囲外	岡田		772.66	分譲住宅	2年4月16日	トレンチを2カ所設定したが、遺構・遺物は確認できなかった。
3	範囲外	信達市場		4,683.64	事務所及び倉庫	2年4月25日	トレンチを2カ所設定した。沼地状の跡序が確認された他には、遺構・遺物は確認できなかった。
4	範囲外	信達市場		996.89	共同住宅	2年5月22日	トレンチを3カ所設定した。全体に近年の擾乱は受けていないが、遺構・遺物は確認できなかった。
5	範囲外	男里		551.27	社宅新築	2年5月23日	トレンチを3カ所設定したが、遺構・遺物は確認できなかった。
6	範囲外	北野		2,768.4	倉庫増築	2年6月1日	工事中立合。盛土内で工事は行われ、遺構・遺物は確認できなかった。
7	範囲外	信達市場		6,129.2	共同住宅	2年6月11日	トレンチを4カ所設定した。シルト・礫の互層が見られたが、遺構・遺物は確認できなかった。
8	範囲外	岡田路 中小北野		469.24	分譲宅地造成	2年6月18日	トレンチを1カ所設定した。遺構・遺物は確認できなかった。
9	範囲外	機井		947.28	共同住宅	2年6月19日	トレンチを2カ所設定した。遺構・遺物は確認できなかった。
10	範囲外	機井		994.44	事務所ビル	2年7月9日	トレンチを2カ所設定した。段丘崖が確認できたが、遺構・遺物は存在しなかった。
11	範囲外	信達市場		989.08	店 舗	2年7月16日	トレンチを2カ所設定した。遺構・遺物は確認できなかった。
12	範囲外	機井		1,314.9	宅地造成	2年8月1日	トレンチを3カ所設定した。遺構・遺物は確認できなかった。
13	範囲外	信達市場		437.57	教会新築	2年8月21日	トレンチを4カ所設定した。削平された丘陵尾根の先端が認められたのみで、遺構・遺物は確認できなかった。
14	範囲外	信達大苗代		3,148.00	倉 庫	2年8月24日	トレンチを1カ所設定した。地山直上に中世遺物包含層を確認。新規発見遺跡。
15	範囲外	信達牧野		598.34	事 務 所	2年9月7日	トレンチを1カ所設定した。遺構・遺物は確認できなかった。
16	範囲外	信達牧野		561.29	共同住宅	2年9月13日	トレンチを4カ所設定した。擾乱はうけていないが、遺構・遺物は確認できなかった。
17	範囲外	機井		741.18	倉 庫	2年10月15日	トレンチを1カ所設定した。擾乱はうけておらず黒褐色土層が認められたが、遺物は含まれていなかった。遺構は確認できない。
18	範囲外	機井		607.27	貸 倉 庫	2年10月17日	トレンチを1カ所設定した。遺構・遺物は確認できなかった。
19	範囲外	機井		998.15	共同住宅	2年10月29日	トレンチを1カ所設定した。遺構・遺物は確認できなかった。
20	範囲外	信達牧野		1,945.25	貸 倉 庫	2年12月20日	トレンチを3カ所設定した。遺構・遺物は確認できなかった。
21	範囲外	碓代		8,465.9	公共施設の宅地造成	3年1月16日 ～3月15日	予定地の山林・谷に、総延長600mのトレンチを設定。谷口部分で遺構・遺物包含層を確認した。遺跡を新規発見。
22	範囲外	信達市場		380.81	事務所付倉庫	3年2月1日	トレンチを1カ所設定。近年の擾乱・削平は認められないが、遺構・遺物は確認できなかった。
23	範囲外	信達大苗代		1,659.56	共同住宅	3年2月14日	トレンチを2カ所設定。遺構・遺物包含層を確認。遺跡を新規発見。

## 第4表 立会調査一覧表

平成3年2月28日現在

No.	遺跡名	位置	申請者	面積㎡	用途	調査年月	備考
1	高田山古墳群	幡代		189.70	住宅新築	2年4月24日	遺構・遺物は確認できなかった。
2	高田山古墳群	幡代		203.96	住宅新築	2年6月5日	遺構・遺物は確認できなかった。
3	フキアゲ山東遺跡	新家		223.75	住宅新築	2年6月28日	遺構・遺物は確認できなかった。
4	狐池遺跡	信達大苗代		1.5	ガス管埋設	2年6月29日	遺構・遺物は確認できなかった。
5	フキアゲ山東遺跡	兔田		28,661	校地土止め	2年8月2日	遺構・遺物は確認できなかった。
6	脩会寺跡	信達大苗代		13.5	ガス管埋設	2年8月7・8日	遺構・遺物は確認できなかった。
7	フキアゲ山西遺跡	新家		249.42	住宅新築	2年9月3日	遺構・遺物は確認できなかった。
8	脩会寺跡	信達大苗代		181.4	水道管埋設	2年9月10日 ～24日	中世以降に擾乱・移動を受けた白鳳期の瓦片、及び中世遺構・遺物包含層を確認。
9	新家古墳群	兔田		16	電気管埋設	2年9月27日	遺構・遺物は確認できなかった。
10	新家中池(溜池)	新家		200	堤体改修	2年12月7日 及び28日	遺構・遺物は確認できなかった。
11	増田池(溜池)	信達岡中		300	堤体改修	2年12月27日	遺構・遺物は確認できなかった。
12	芦谷池(溜池)	信達市場		600	堤体改修	2年12月27日	遺構・遺物は確認できなかった。
13	男里遺跡	男里		318	河川改修	3年1月7日	遺構・遺物は確認できなかった。
14	岡中遺跡	信達岡中		140	道路水路改修	3年1月11日	遺構・遺物は確認できなかった。

## 第2章 男里遺跡の調査

### 第1節 既往の調査

男里遺跡は市域の西辺に広く展開する市域有数の複合遺跡である。地形分類的には、遺跡中央付近に旧河道痕跡とされる双子池があり、男里川の形成した自然堤防・後背低地・氾濫原及び、東南から伸びる長山丘陵から続く沖積段丘へと多様な広がりを見せている。

これまでここでは、先人の踏査時代を含め数多くの調査が行われてきた。その結果、この地では縄文時代晩期から近現代にいたるまで、人の生活活動が営まれてきたことが明らかとなった。これに、近年急増した調査例の成果をあわせると、各時代ごとのおおまかな遺物分布・集落分布の推定が可能となってきた。以下その概観を記す。

まず、縄文時代の遺物出土は、これまで遺跡の北縁付近に位置する晩期の溝出土の一群のみが知ることのできるすべてだった。しかし、最近遺跡の中央付近、双子池北側の地点から若干ではあるが出土が確認されている。このことから、これまで遺跡の中では点としてのみしか確認できなかった縄文文化分布も、ある程度範囲を広げてとらえることが可能となった。

双子池南方一帯では古くから弥生時代遺物包含層が確認されている。この周辺では竪穴住居・木棺墓も検出されており、将来集落・墓域の範囲確認が期待できることは以前にも述べたとおりである。近年これらに加え、新たに双子池西側堤体下層から中期後半の溝が確認された。小規模の調査であったため詳細は不明だが、この溝は庄内期には埋没していることが確認された。

これとはべつに、広く男里川右岸流域に視野を広げると、男里遺跡の北西に今年度新規に発見された高田遺跡において中期の壺が出土している。これは、「拠点集落」たる男里とその周辺部に所在する集落との関係を論じていくうえで、男里遺跡の評価を左右するデータが得られたと言えるだろう。

また、近年の調査で遺跡中央、双子池の北縁堤体部分で埋没した旧河道の上面から庄内式土器が出土している。この調査では、約20 m以上の幅員を持つ大

規模な河道の存在が明らかになり、これまで地形学的にのべられてきた「男里川旧河道」の存在を実証することとなった。

古墳時代の集落分布は、遺物の分布状況や確認された遺構が少なかったことなどから、これまでの弥生時代の集落推定範囲ときほど変わらず、遺跡の中央から南部にかけてといった見方が支配的だった。しかし、近年の調査では遺跡の北西方、現在の男里集落の中心付近から、6世紀後半の土器群があたかも土坑に埋納されたような状況で出土した。この土器群の出土により、周辺に古墳時代集落の存在が推定できることとなった。この地点は、地形分類的には自然堤防上にあたり、これまで検出した遺構等から中世以降に集落が形成されたととらえてきたところである。この調査での知見により、中世の集村形成以前にも何等かの生活活動がうかがえることとなった。

さて、古代になると集落の分布は若干広がりを見せ、遺跡中央から北西側へと展開して行くこととなる。しかしやはりその中心は双子池周辺、特に弥生集落推定地の北側付近に認められる。今年度の調査でもこの古代の遺構が集中した地点付近から奈良時代の遺構が確認されるなど、その実態は徐々に明らかになりつつあるといえよう。

中世になると、ほぼ遺跡の全体で遺構が確認できる状況となる。特に現在の行政区画でいう、男里集落と馬場集落周辺には密集して認められ、中世の集村形成過程を知る手がかりとなっている。また遺跡の西縁、現在の馬場集落の南端では、沓瀬原に面した中世段丘上に展開する集落の一部が確認できた。ここからは泉南市域の中世を象徴する白色土師器が多量に出土しており、中世、特に室町期における局地的な土器様相の差異が改めて指摘されつつある。現状では白色土師器の分布などについてのデータ集積が待たれている段階である。

以上、これまでの男里遺跡の調査成果概略をのべてきた。各時代ごとの成果の評価は、基本的に縄文から古代までは遺構の分布範囲のより詳細な把握を、中世はより綿密な遺物分析が望まれるという段階であるが、まだまだ不明確な部分が多いといえよう。今後、より多くの、より深い調査研究が必要である。

## 第2節 90-1区の調査

### 1. 位置(PL. 2)

1区は現在の男里集落北端にあたり、北側には広く水田が広がる。地形分類上は、自然堤防上に立地している。

周辺の調査例では、南約80m程の地点から室町期のものと考えられる石組をもつ土坑墓や、河原石が充填された土坑等が確認されている。これより北側の部分は水田ばかりで、これまで調査はほとんど行われていない。

### 2. 層位と遺物の出土状況(PL. 3・8)

基本的な層序を上から順に述べると、最近までの耕土・床土層および旧耕土・床土層と思われる灰色系土と灰褐色系土が交互にみられる。この下層には黄灰色土が介在し、地山である灰褐色砂質土にいたる。

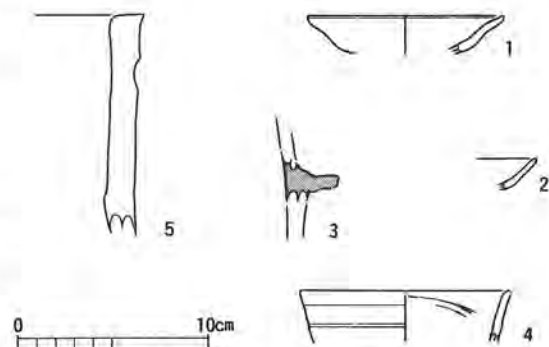
遺物は、旧床土層である灰色混じり褐色土から土師器細片や須恵器片等が出土したにすぎない。遺構は検出されなかった。

### 3. 遺物(PL. 17、第1図)

遺物はほとんど出土せず、わずかに中世の所産と思われる土師器細片と、同じく中世の東播磨系須恵器・甕の体部片が出土したに過ぎない。これらは図化不可能なものばかりであった。

唯一図化できたものに、瓦質の蛸壺(5)がある。内面は布目圧痕が残り、一瞥すると薄めの平瓦と思われるものである。口縁端部外面のやや下方には1状の凹線が施され、縄掛けの役目を担っている。胎土は粗く砂粒を多く含み、淡橙灰色軟質で、いわゆる土師質に近い製品である。

このタイプの蛸壺は、完全な製品の出土例はいまだ知られていな



第1図 男里遺跡90-1・3区出土の遺物



いが、破片などから推定すると、直径10cm程度、長さ20cm程の円筒の底部を袋状に丸く納めた形、あたかも薬品のカプセルの一端をカットしたかのような形状になるとおもわれる。過去に男里川下流域の試掘調査で河道内から出土した例があるのみで、これまで市域でも注目されず、看過されてきた可能性があるため、今後の注意を喚起するため、あえて報告しておきたい。

### 第3節 90-2区の調査

#### 1. 位置(PL. 2)

現男里集落の北西部、ちょうど90-1区から南へ約100mの地点にあたる。当調査区の西側隣接地内で先にも述べた河原石充填土坑が確認されている。また、北側隣接地では、同じく石組土坑墓が発見されており、室町期の何等かの遺構確認が期待された地点だった。

#### 2. 層位と遺物の出土状況(PL. 3・8)

上から順に、近世から近代にかけて行われた盛土、近世包含層である暗灰黄色土、そして中世遺物包含層である暗灰色系土層が3層続く。この下層に地山である暗灰褐色礫が約40cm続き、さらに暗灰色系のいわゆる川砂層が認められる。

遺物は各包含層からわずかに近世平瓦片、中世瓦器細片・土師器細片が出土したに過ぎない。これらは皆摩滅が激しく、図化できるものはなかった。

#### 3. 遺構(PL. 3)

土坑を1基検出した。断面で観察したにとどまるため、平面形は不明である。埋土は3層に別れ、下層からそれぞれ暗灰色砂(川砂)、暗黄灰色砂質土、円礫の混じる灰色砂となる。断面で確認できた部分での法量は直径1m以上、深さ約55cmを測る。

埋土の状態から、短期間で埋没していることがうかがえること、および埋土最上層には近世瓦片が含まれており、中世の遺物包含層を切り込んで作られて

いることから、中世でもかなり新しい時代以前には遡らず、近世のある一時期に形成されたものと考えておきたい。

#### 第4節 90-3区の調査

##### 1. 位置(PL. 2)

本調査区は男里遺跡の北西部にあたり、この地域の幹線道で、遺跡の北半部を北東から南西方向に貫通する府道堺阪南線よりさらに北に位置する。調査区の西側には、堺阪南線と直結する府道鳥取南海線が走っている。

この箇所は、地形分類上で自然堤防上に位置する地点である。

##### 2. 層位と遺物の出土状況(PL. 3・9)

第1トレンチは8層からなり、第1層が盛土で50~70cm、第2層が灰色砂質土、第3層が青灰色砂質土で、それぞれ10cm程の堆積が部分的に認められる。

第3層は黄灰色砂質土であるが、調査区西端には及んでおらず東側へと厚みを増している。最厚で25cmを測る。第5層から第8層においては、南から北方向へと堆積した状況を示している。第5層が褐色混じり灰色砂質土で15~45cm、第6層が黄褐色混じり淡灰色砂質土で15~28cm、第7層が灰色混じり黄褐色土で約20cm、第8層が灰色混じり黄褐色シルトで10~20cmを測る。地山は青灰色砂礫で、礫は小指大の円礫が平均である。

遺物は第6層より平瓦が1点と土師器・蛸壺片が僅かに出土している。いずれも中世の所産になるものである。なお遺構は検出されなかった。

第2トレンチは、第1層が盛土で50cm、第2層は黄色粘土混じり暗灰色土が東半部のみ堆積で6~18cm、第3層が炭混じり暗灰色土で12~24cmの厚さを測る。第4層以下は第1トレンチ同様、南から北側へと低く傾斜をもって堆積している。第4層は黄褐色土混じり灰色シルトで15~28cm、第5層が灰褐色シルトで5~20cmの厚みである。

第6層以下は、特に整然とした堆積ではなく、河道などによる氾濫を思わせるものである。灰褐色シルトからなる第6層は8~20cm強を測る。暗青灰色シル

トの第7層は8~40cm以上、淡褐色砂礫の第8層は28cm以上をそれぞれ測る。

このトレンチにおいて第1トレンチと異なるのは、第4層以下で顕著なシルト層の堆積である。近接しているにもかかわらずこの違いは、自然堤防形成前の旧河道の存在を匂わすものとも考えられる。残念ながら湧水が激しく、地山まで確認することは出来なかった。

遺物は第4層より土師器・皿・蛸壺、瓦質土器・土釜、陶器・椀、平瓦、丸瓦が少量出土している。

なお遺構は地山未検出のため不明であるが、他の面では確認できなかった。

### 3. 遺物(PL. 17、第1図)

出土した遺物といってもさほどあるわけではなく、なおかつ全貌を知り得るものもない。そうはいても、この調査区、つまり現・浄泉寺の前身を考えて行くうえで、貴重な資料は獲得されている。

さて、遺物の種類を列記すると次の通りである。土師器・小皿、瓦質土器・土釜、常滑焼・甕、瀬戸焼・椀などの日常雑器の他、平瓦、丸瓦の屋瓦類、そして土師器・蛸壺といった漁具などがみられる。

土師器・小皿は2点出土している。いずれも図示しているが、底部が残存せず決して良好な状態のものではない。1は体部が外反し口縁部に至るものである。口縁端部は内面に肥厚する。調整は内外面とも横方向のナデであるが、口縁部上半は強いナデが施され、下半との境に段が生じてる。焼成は良好で淡灰色を呈するが、内外面ともに煤の付着が著しく、本来は白色系のもと思われる。胎土は砂粒を含むが、精緻なものである。口径は10cmを測る。

2は内外面に横方向のナデ調整が施されたやや軟質な製品である。口縁端部は丸くおさめられている。胎土は精緻である。

瓦質土器・土釜は、全容の分からない鏝の部分が1点出土している。3は、やや礫の混入した淡黒灰色を呈するものである。鏝は、ほぼ水平に伸びるものと思われる。端部はナデにより平坦に仕上げられている。なお、鏝の上・下面はナデ調整が施され、僅かに残る体部は内面にハケ調整の後ナデが、外面にヘラケズリがそれぞれ施されている。

陶器は図示した瀬戸焼・椀のほかに、常滑焼・甕の体部片が1点出土している。4の椀は体部が外反し口縁部に至り、端部を丸くおさめるものである。内外面に横方向のナデ調整の後、丁寧なごく薄い水色の釉が施されている。焼成は堅緻であり、胎土は非常に緻密である。口径10.9 cmを測る。

図示出来なかった常滑焼の甕は、非常に粗い礫を含む焼成良好な暗青灰色を呈するものである。内外面ともにナデ調整を施している。

土師器・蛸壺は体部片が3点出土しているが、図示は出来なかった。残存する体部は、赤色粒を含む軟質な焼き上がりの黄橙色を呈する厚さ2.2 cm程のものと、比較的砂粒を含むがよくしまった焼きの良い橙黄色を呈する厚さ0.9～1.2 cmの薄手のものがある。それぞれ中世と近世の所産になるものである。どちらも内外面にナデ調整を施しているが、成形時の凹凸を残している。

平瓦は、凸面ナデ調整を施した製品がある。赤色粒が多量に混入する胎土の粗い軟質で黒灰色を呈するもので、厚さ約2 cmを測る。また、須恵質の製品で凸面凹面ともに離れ砂が付着しているものもある。

丸瓦は凸面に縦方向のナデを施し、凹面に布目痕を残すものである。焼成は堅緻で黒灰～淡灰色を呈する。胎土は最大5 mmの礫を多量に含み粗い。厚さ2.1～2.5 cmを測る。

## 第5節 90-4区の調査

### 1. 位置(PL. 2)

調査区は男里遺跡中央にある双子池北側に位置している。現在遺跡を南北に分断する府道堺阪南線に面した場所である。当該地は男里川の旧河道推定地内に当たる。

### 2. 層位と遺物の出土状況(PL. 3・9)

層序は上から耕土・床土と旧耕土・床土の5層が続く。この下層には、東へ向かって傾斜するように淡黄灰色系の砂質土が堆積しているが、この層間に一部黒褐色土が介在している。さらに下層には、暗灰褐色粘土や灰色礫層が認め

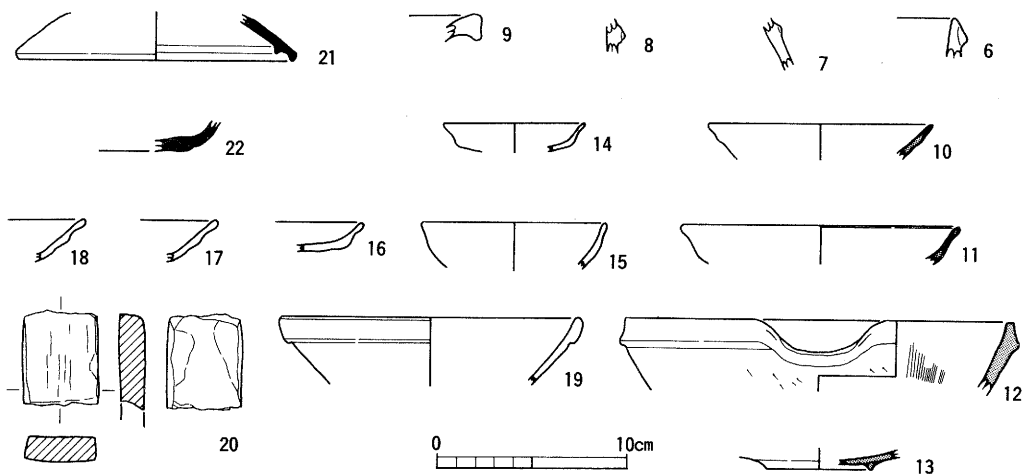
られた。遺構は検出されなかった。なお激しい湧水と、このための壁面崩壊の恐れから、これより下層への調査は断念せざるを得なかった。

遺物の出土は、基本的に淡黄灰色系の砂質土から縄文・弥生土器や古代須恵器片が多く出土した。この他には、旧耕土・床土層から中世遺物が、床土から中近世遺物が出土している。また、検出した中での最下層である暗灰褐色粘土や灰色礫層内からも弥生土器とおぼしき土器細片が出土している。これらはすべて摩滅が激しく、二次的な移動を受けていることがわかる。

### 3. 遺物（PL. 17、第2図）

遺物は縄文土器、弥生土器、古代の須恵器・杯片、土師器・甕片、中世では土師器・皿・紀伊系甕片、瓦器・椀、瓦質土器・すり鉢、磁器・椀、陶器など幅広い時代にわたる遺物が、比較的多く出土した。この他にもサヌカイト片、土錘、蛸壺、壁土、砥石なども若干ではあるが出土している。

6～8は縄文土器である。6は深鉢口縁部片で、口縁端部と端部外面にめぐらした突帯にはキザミが施されている。7は深鉢体部片である。口縁部と体部の接線直下にめぐらされる突帯部分であろう。突帯上にはキザミが施されている。8は突帯部分のみの細片のため、器形・部位の判断は控えたい。これらは3点とも淡褐色～褐色で粗い砂粒を多く含む胎土を持つ点で共通している。皆摩滅が激しく器壁の観察は不可能だった。



第2図 男里遺跡 90-4・7区出土の遺物

9は弥生土器・壺の口縁端部である。口頸部からだんだん肥厚しながらラッパ状に伸びる。端部はやや外下方に垂下し、外面に平らな面をもつ。淡橙褐色で胎土は粗い。これも摩滅が著しい。

10・11・13は瓦器・椀である。摩滅が激しい上、細片ばかりで調整についてはまったく観察不可能だった。

12は瓦質土器・すり鉢である。外面はヘラケズリ、内面には一部にハケで施されたすり目が残る。胎土は粗く軟質で、茶褐色～黒褐色を呈している。

14～18は土師器・皿である。皆胎土は緻密で混入物はきわめて少なく、色調は乳白色を呈している。調整はわずかにユビオサエ及びナデが認められる程度。いわゆる白色土師器の範中に含まれるもので、泉南市域でたびたび出土するものとは形態・胎土などが酷似する。これもまた細片ばかりが多い。

19は青磁・椀で緩やかに内湾しながら上方に伸びる口縁部は、端部で外側におり曲げられ、玉縁状の口縁端部となっている。灰白色の胎土には若干黒色粒が混じる。釉は淡灰緑色である。

20は砥石である。薄い板状に整えられており、残存する各面はすべて小口部分まで長軸方向に擦痕が残り、よく使用されたことがうかがえる。

## 第6節 90-5区の調査

### 1. 位置(PL. 2)

調査区は遺跡の中央西縁に位置し、地形分類上は沖積段丘上に立地している。現状は、遺跡西部を南北に通る市道・樽井馬場鬼木線に面したところである。調査区西側に目を向けると男里の広い水田地が広がり、その彼方に双子池を望むことができる。

当該地は、以前から指摘されている遺跡内に広がる性格不明の「黒褐色土層」の推定分布範囲内にあたり、今回もその検出が期待された。

### 2. 層位(PL. 3・10)

基本的な層序は3層を数える。盛土を除き上から順に、耕土である暗灰色土、

黒褐色土、そして地山である黄灰色含礫土である。周囲の状況からも近年削平を受けたとは考えにくいだが、明確な遺構・遺物包含層は検出できなかった。

ここでも黒褐色土層が確認できたが、やはり遺物は含まれておらず、その性格はもちろん堆積時期までもが不明のままである。

## 第7節 90-6区の調査

### 1. 位置(PL. 2)

位置は、先述の90-5区から市道をはさんだ東側、約10mの距離にある。これより東側には長山丘陵が南北に長く伸び、これが男里周辺の平坦地と以東の段丘上の馬場・樽井地区を区切っている。調査区は地形分類上沖積段丘面にあたるが、これより東方の段丘面は洪積段丘ととらえられている。

### 2. 層位(PL. 3・10)

調査区は最近まで工場が建てられていたため、盛土以下に攪乱が及んでいることが予想されたが、以外に良好に保存されていた。しかしながら、耕土・床土層の直下には暗赤褐色礫層が広がり、包含層は存在しないことが確認された。

## 第8節 90-7区の調査

### 1. 位置(PL. 2)

調査区は双子池の東方、遺跡の東縁付近に位置する。地形分類上は沖積段丘面と氾濫原・谷底低地の境界付近にあたる。後述するように、これまで多くの調査が行われており、遺跡内でも比較的遺構が多く検出されており、とりわけ古代遺構の密集地として認識されている地点である。

### 2. 層位と遺物の出土状況(PL. 4・5)

基本的な層序は、上から耕土・床土層、旧耕土に当たる淡褐色混じり灰色土、暗褐色土あるいは黒褐色土、そして地山である黄灰色粘土あるいは淡赤褐色礫

層へといたるものである。しかし、調査区中央付近で大きく攪乱を受けており、耕土直下地山に至るまで削平されている部分が大半を占めている。これにもかかわらず、遺構面である黄灰色粘土上面は幸いにも大幅な削平を受けていなかった。

かなりの数の遺構が検出され確実に集落が存在するにもかかわらず、遺物の出土は包含層・遺構どちらをみても非常に少ない。わずかにSX01内から須恵器・杯・杯蓋および土師器・甕細片が若干出土したのみで、そのほかは旧耕土層から中世に属するとおぼしき土師器細片が若干出土した程度である。

当該地の周辺では近年多くの調査が行われており、その各々で層序に違いが認められた。北側隣接地では比較的似通った層序で、遺構も中世のピット群が検出されている。ところが、東側の市道をはさんだ地点からは、比較的高い位置から円礫層の地山がみられ、包含層もほとんど存在しないといったように極端な差異が存在する。ちょうど現在の市道で区切られてしまっているようだ。

### 3. 遺構（PL. 4・5・11・12）

当調査区は、これまでの男里遺跡の調査から推定して、遺構の密集地域としてとらえられてきた部分である。今回の調査ではその期待に違わず、多くの遺構が検出されるという結果が得られた。

遺構の種類は大別すると不定形土坑、ピット、溝などが多数検出されたが、どれもほとんど遺物は出土しないため、掘方の場合大まかに分けて方形に近い掘方は古代の、小型で円形のものの中世のピットととらえた。

調査区を北半・中央・南半と仮りに分けると、北半では不定形の土坑・ピットが主を占める。中央付近では大小の堀方、土坑、性格不明遺構等多くの遺構が密集している。

南半部分では地山も礫層へと変化しているせいか、遺構の分布密度は低い。わずかに浅いピットや土坑がわずかに認められたのみであった。耕土直下で確認されていることや、地形的にも南側に向かってのぼっていくことなどから、ある程度の削平が想定できる。

古代の所産に属すると思われる堀方は、その大半が調査区中央付近に集中し



ている。明確な建物としてとらえることはできなかった、これらは、N45°W方向に並ぶ一つのまとまりとしてとらえることができる。

また、東西方向においても遺構の分布に差異が認められる。比較的大きな堀方の密集部分を中心とするならば、これより西側は小型で浅い円形ピットと土坑群、中心より東側には一度遺構の希薄な空間が存在し、その東側に1条の溝が走ると言ったように。

以上の遺構はごく一部を除き、黒褐色土直下の地山上面で検出されている。その埋土は基本的に黒褐色のものが大半をしめ、小型で円形のピットの一部に暗灰褐色系の埋土を持つものが認められた。

SX01は平面形はややいびつな長楕円で、肩から中央付近に向かって緩やかに落ち込む。埋土は黒褐色土とその下層にわずかに炭がまとまって堆積している部分がみられた。この炭層の下層は特に焼けしまった焼土面は認められず、一定期間火を燃やしたと言った状況ではなかった。また、河原石が底面上に置かれているように埋没していた。特に面を持つ等といったものではないが、この他に同様の石は存在しなかったため特筆しておきたい。遺構の法量は長軸方向に4 m、短軸方向に2.5 m、最大深さ15 cmを測る。

#### 4. 遺物（PL. 18、第2図）

遺物の出土量はきわめて少なく、わずかにSX01より須恵器・杯・杯蓋および土師器・甕細片が出土したにすぎない。しかも実測可能なものは須恵器のみであった。以下に説明を加えたい。

21は須恵器・杯蓋である。端部はわずかに内下方につまみ出されるが、外面には明確な面は持たない。カエリは、比較的シャープだが低いものである。

22は杯底部である。摩滅が激しいため、わずかに回転ヘラケズリが認められる程度である。2点とも胎土にはわずかに砂粒をふくむものの概ね精良で、灰色を呈している。

## 第3章 幡代遺跡の調査

### 第1節 既往の調査

幡代遺跡の内容については、近年の調査で得られた資料から平安時代後期・室町時代そして近世という、大きく分けると3時期の盛期が確認されている。また、弥生時代の製塩土器が出土しており、同時代の遺物出土も期待できる。このような幡代遺跡についての認識は、以前にも述べた。では、これまでに確認された遺構の分布についてはどうであろうか。

これまで遺跡内で遺構が確認されているのは、東西に長い楕円形に展開する集落の西縁付近とその中心付近のみである。調査面積が狭小なものが多いため、遺構の性格等については追求できていないが、平安後期から中近世のものが確認されている。しかし、いまだ弥生時代遺構や、存在がある程度確実と思われる中世寺院の関連遺構等は確認されていない。このように、遺構分布については、現在のところデータの積み重ねがまだ不十分な段階だと言える。

しかし、今年度は新たに2カ所で遺構を確認し、その集落範囲の推定に貴重な情報を得ることができた。

さて、当遺跡周辺では、この他にも貴重な歴史情報が存在する。条理地割の存在である。

現在集落を南北に二分しながら東西に走る生活道路がある。この道路は東から進めば、まっすぐ集落中心に向い、そこで北へ一度、西へ一度ほぼ直角にまがりながら、まっすぐ西側へと抜けていく。集落内でもまた周辺の一部の田畑でもこの東西に走る道路に対し、ほぼ平行・直角の地割が看取できる。この地割は、北で西へ約 $10^\circ$ 偏っていることがうかがえる。同方向の地割が存在する範囲は、集落の東端付近から集落とその北西付近の、ごく狭い範囲に限られている。

このように、幡代遺跡東方の田畑に認められる約 $20^\circ$ 西偏する地割も含め、当遺跡周辺にはごく小規模ながら、複数の地割が残っている可能性があるだろう。市域の地割についても、より多くの情報収集が待たれている状態だといえよう。

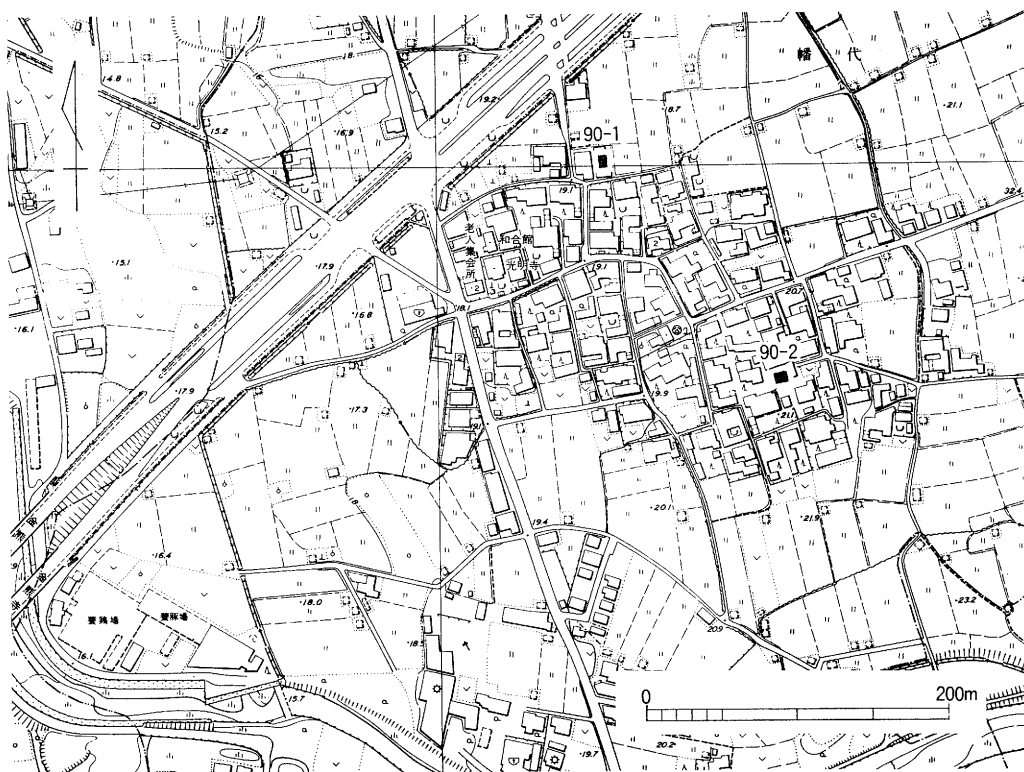
## 第2節 90-1区の調査

### 1. 位置（第3図）

遺跡の中央北端付近に位置しており、現在の行政区画でいえば幡代集落の中央北縁付近にあたり、ちょうど国道26号線に面した位置になる。地形分類上は沖積段丘に立地する。調査区の東南では、現在も利用されている湧水池があり、良好な地下水脈の存在が知られているが、これまでも調査区東側付近で埋没河道様の層序が確認されるなど、ごく近接地で金熊寺川の旧河道の存在が指摘されている地点である。

### 2. 層位と遺物の出土状況（PL. 6・13）

基本的な層位は、上から耕土・床土層が残り、この下層の一部に淡黄灰色系土層が介在したうえで、淡茶灰色土へと続いていく。これより下層は、黄灰色粘土の地山および落込みの埋土となる。



第3図 幡代遺跡調査区位置図

遺物が出土するのは淡茶灰色土で、土師器・皿・甕、瓦器・椀、瓦質土器・土釜等が多く出土する。石組の上層からは、平安後期にまで遡ると思われる平瓦片、土師器・皿、瓦器、瓦質土器、常滑片などが、石組遺構の下部からは瓦質土器・土釜、土師器・皿、瓦片等が出土している。

### 3. 遺構（PL. 6・13）

当調査区では、ピット・落込みと、これが埋没したのちに形成された石積とが検出された。

ピットは地山上面で検出された。トレンチに一部がかかる状態で検出されており、調査面積の関係から全形は知り得なかったが、どちらも直径20 cm内外を測る比較的小型なものである。埋土は両者とも暗灰褐色土で、深さは7 cmを測る。遺物は出土しなかった。落込みの上面で確認されているため、遺構群として捉える場合、時期的には落込み・石積のどちらに伴うものか、あるいはまったく別時期の所産となるものかは断定できない。

落込みはごくわずかに南へ傾斜する平坦な地山面が、明確な稜線を形成して急激に落ち込むものである。肩稜線はほぼ東西にはしる。埋土は基本的に灰色系粘土と礫を含む黄灰褐色系粘土からなる。後述の石積はこの落込みの埋土上に構築されている。上面と最下部とは約70 cmのレベル差がみられる。

この遺構は、地山面の急激な傾斜部分が特に明確な稜線を伴うものであるため、人為的なものと判断し遺構ととらえたものだが、あくまで小トレンチでの調査と言うことで、単なる地山面の急激な傾斜部分となる可能性も否定できない。もちろん、より規模の大きな溝や土坑である可能性も同様に含まれている。

石積は人頭大の河原石を並べ、南側に面をもたせて構築されている。その方向はほぼ東西方向に直線的に並べられている。各々の石は間隙に小石を詰めて堅固に積まれている。石材は大半が砂岩質河原石で、1点だけ結晶片岩が使用されていた。検出部分で約1 m、高さ約20 cmを測る。

石積上から2点ほどずり落ちている河原石が確認されていることから、最低2段以上の石積であったことが知られるが、この南側には多量の河原石が散在しており、より高く積まれていたことが推定される。

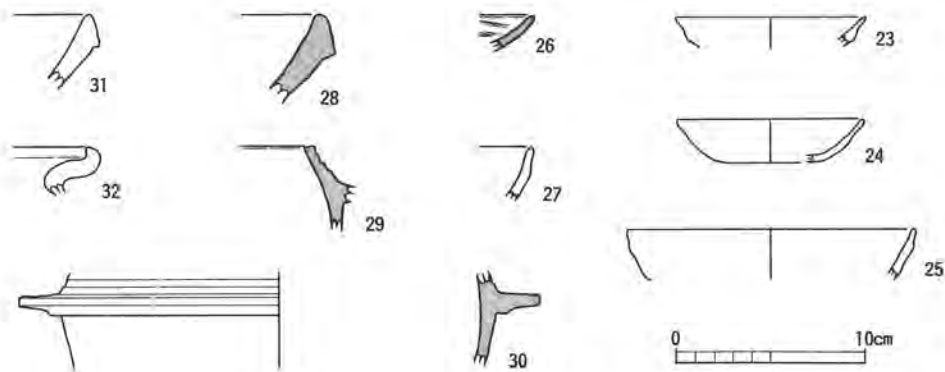
#### 4. 遺物 (PL. 18・19、第4・5図)

遺物はおもに淡茶灰色土から出土する。図化できたものは大半がここから出土したものである。この他には崩壊した石積の下層・上層から瓦器、瓦質土器、土師器、陶器、瓦等が出土するが、図化に耐えるものはほとんどなかった。

淡茶灰色土からは、瓦器、瓦質土器、土師器・皿、土師器・紀伊系甕、陶器のほかには鍛冶滓がわずかではあるが出土している。ここでは、図化できたものを中心に説明を加えたい。

23～25は土師器・皿である。23はぶ厚い底部から薄い口縁部が短く直線的に伸びる。摩滅が激しいため調整は不明。胎土は乳白色で精緻。口径は10cmを測る。24は緩やかに内湾しながら上方に伸びる口縁部を持ち、その端部は丸く納められる。底部はさだかではないが、やや内側にへこむ形となるようだ。胎土は精良で乳白色を呈し、口径は9.8cmを測る。25は厚い底部から強いナデ調整によって薄く仕上げられる短い口縁部がつく。色調はやや橙色がかかる乳白色、胎土は精良である。比較的大型の製品で口径は15cmを測る。3点ともいわゆる白色土師器の範疇に含まれるものである。

26は瓦器・皿である。摩滅が激しいが、内面にはかすかにまばらな暗文が認められる。細片のため口径不明。27は陶器・碗で、胎土は淡黄灰白色で、釉は灰茶色を呈す。いわゆる瀬戸美濃系のものであろう。28は瓦質土器・鉢で、口縁端部外面には、内傾する丸みを帯びた面を持つ。内面には横位のハケ調整が施されている。淡灰色を呈す硬質の製品。29・30は瓦質土器・土釜である。



第4図 幡代遺跡90-1区出土の土器

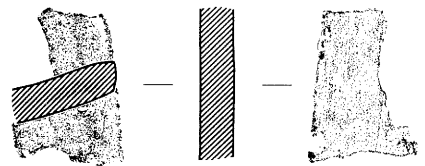
29はやや内傾する口縁部を持つ。30は比較的しっかりと作られた罫をもつ。体部外面はヘラケズリで薄く仕上げられている。欠損のためさだかではないが、やや口縁部はたち気味になるものである。

31は土師器・鉢で、端部外面には内傾する面を持ち、その下端はシャープにつまみ出される。焼成は良好で淡橙灰色を呈する硬質の製品。32は甕で胎土には結晶片岩細粒を多く含む。いわゆる紀伊系のものである。

以上のうち、29が崩壊した石積の下層から出土しているほかは、すべて淡茶灰色土から出土した。

当調査区ではわずかながら瓦片も出土した。

33は、細い縄痕の縄たたきが施される薄手の製品である。凸面には、側端方向に平行なたたきの後ナデ調整されており、摩滅が激しいこともあいまって縄痕はほとんど残らない。凹面には布目圧痕は認められない。凹面側の側端縁は幅1.5cm程の面取りがおこなわれている。焼成は甘く軟質で、胎土にはクサリ礫・白色の砂粒を多く含む。また、断面には黒くにじんだような黒色粒が多く認められる。摩滅していなければ、かなりシャープに調整されていたことがうかがえる製品である。



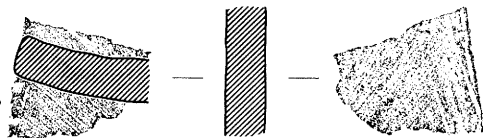
33

34は、比較的太い縄痕が残る縄たたきがおこなわれる厚手のもの。凸面はたたきの後調整はほどこされず、縄痕は明確に残っている。凹面は、全体に薄く剝離しており、その調整はまったくわからない。胎土はクサリ礫や砂粒が若干含まれるものの概ね精良。しかし、粘土自体はよく練られておらず、断面には縞状に粘土の層が見受けられる。焼成は甘く軟質。



34

35は非常に硬質で、凸面には糸切り痕と縄たたきおよび離れ砂が残る。凹面にも糸切り痕が良好に残り、一部には布目



35



第5図 幡代遺跡90-1区出土の平瓦

圧痕が確認できる。側端面はさほど調整は行われず、わずかに凹凸両面側の縁が面取りされる程度である。相対的に胎土は粗く、暗灰色のクサリ礫が非常に多く含まれている。焼成は良好で硬質。細部は非常にあらく作られたイメージの製品である。

瓦片は合計10点ほどが出土しているが、調整等の特徴があらわれているものは以上の3点のみで、このほかは細片ばかりであった。出土位置は、33のみ崩壊した石積遺構の上面から出土したほかは、すべてより上層の淡茶灰色土の出土であった。また、崩壊礫層の下部にもわずかに軟質瓦が認められたが、細片のため詳細は不明である。

### 第3節 90-2区の調査

#### 1. 位置(第3図)

調査区は遺跡のほぼ中央、現在の集落中央東端付近に位置する。集落周辺にうかがえる地割の東端付近にあたる地点である。

#### 2. 層位と遺物の出土状況(PL.6)

当地にも最近まで住宅が建てられていたが、田畑の耕作土を除去せずに盛土を施しているためか、建物による攪乱・削平は免れていた。

盛土を取り除くと、上から耕土・床土層、礫を含む灰褐色砂質土、暗黄褐色土、地山である黄灰色粘土へと続いていく。地山直上層と地山上面の境界はさほど明確ではない。地山面はわずかに南側に向かって傾斜しており、その上面には若干の起伏が認められる。

遺物は地山直上から床土直下までの2層から出土している。どれも二次的な移動を受けていることは明白で、摩滅が激しいものばかりである。

#### 3. 遺構(PL.6・13)

地山上面で、ピットを4カ所と落込みを確認した。

ピットは密集して存在し、ほぼ接するような状態で検出された。埋土は皆灰

褐色土で、遺物はどれからも出土しなかった。規模は直径約25cm、深さ10cm内外を測る。

落込みはピットと切りあうような状態で検出された。遺構の肩は、緩やかに傾斜する地山面がやや傾斜を強めるといったもので、さほど明確な輪郭とはならないものである。落込み底部付近には部分的に礫の堆積が認められた。埋土は均一に暗黄灰褐色土である。出土遺物は、埋土上面から土師器・甕細片が出土したに過ぎない。

#### 4. 遺物

包含層からは、土師器・紀伊系甕や瓦器・椀高台片等が出土しているが、先にも述べたように遺物は摩滅が激しく、図化に耐えるものはなかった。



## 第4章 岡中遺跡の調査

### 第1節 既往の調査

岡中遺跡は、市域の西側を流れる金熊寺川右岸の氾濫原上に立地する。この金熊寺川流域では上下流ともに遺跡の発見が増加し、市域の歴史にその多彩な情報を与えている。また、遺跡近くを通る2本の街道は、紀伊への重要な交通路となっており、彼の地との交流を知る上でも岡中遺跡の持つ情報は貴重なものであることはいうまでもない。

当遺跡は発見から日が浅く、おこなわれた調査数も比較的少ない。これにもかかわらず、非常に多くの情報が知られてきている。

これまでに現在の集落中心部では、氾濫原上に展開する土坑墓群や、中世寺院跡、及び製鉄関連遺構などが検出され、中世特に15世紀を中心とする時期の遺構が密集していることが知られている。ここでの出土遺物からは、軒丸瓦から市域に出現する各中世寺院間での同范関係が知られることや、室町期の特徴ある「白色土師器」が大量に出土することなど、その包蔵する歴史情報は計り知れないものがある。

しかし一方で、これまでこの時期の集落遺構は確認されておらず、包含層の範囲を確認することも含めて、今後の調査に期待がもたれている。

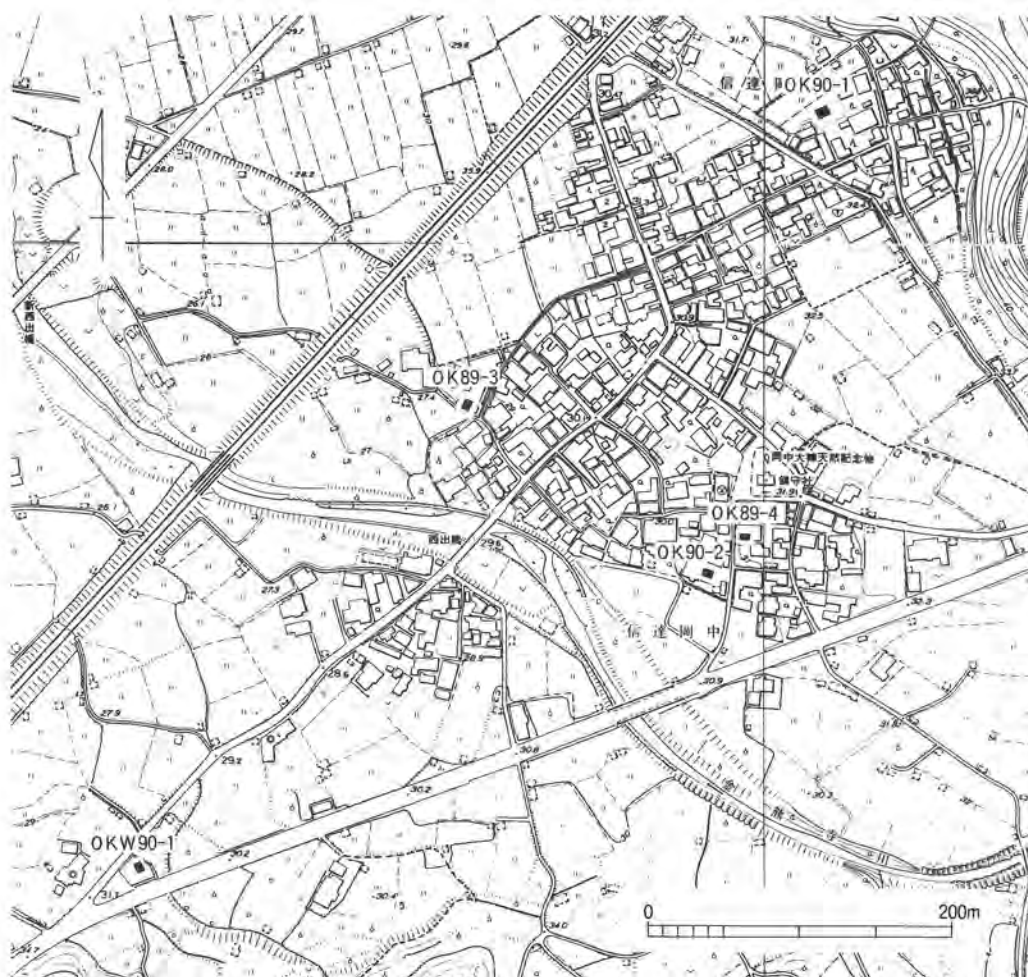
また近世の遺構検出も増加している。それらは、現在の集落位置とさほど違わない位置から発見されており、ほぼ岡中集落が現在の規模になったのは、近世に求めることができそうである。言い替えれば、現在も岡中集落では、古街道に面して軒を連ねている家並には数百年の長きにわたりつたえているものがあり、近世の村落様相をそのまま現在に伝えていることがわかる。

今後の調査により、いまだ不明である中世の集落を知ることができれば、中世から近世、そして現代へと連綿と営まれる村落の姿を如実に知ることができる、貴重なケースとなる可能性がある。

## 第2節 90-1区の調査

### 1. 位置(第6図)

調査区は遺跡の北東縁に位置し、すぐ東方に存する愛宕山の山裾上に立地している。現在の岡中集落の北東縁付近にあたり、集落中心からはもっとも離れている。岡中集落は古く、愛宕山裾とより西側の低地部分との2カ所の集落が「合併」したといわれる。当調査区は前者の範疇に当たるため、合併前の集落の存続時期を知ることが期待された。



第6図 岡中・岡中西遺跡調査区位置図

## 2. 層位と遺物の出土状況(PL. 6・14)

耕土を取り除くと床土が認められた。この下層には灰色系土とその下層の黄灰色系土の組合せが3組続いていく。この組合せがすべて耕土・床土となるのなら、現代の耕土層も含めると、ここでは65cmの厚さにおよぶ4代の耕土層が存在することになる。蛇足ながら付け加えると、市域で耕土・旧耕土と複数耕土が認められる場合、往々にして最下層の床土のみ良好な粘土を使用していることが多い。ここでも同様に黄色の粘土を厚く張っている様子が見えた。

これより下層には、褐色混じり暗灰色土、黒褐色土、灰褐色粘質砂土とつづき、地山である暗灰色礫層へいたる。

遺物はほとんど出土せず、旧耕土層からわずかに近世の所産となる瓦片が出土したほか、若干の土師器細片が確認されたのみである。遺構は確認できなかった。

## 第3節 90-2区の調査

### 1. 位置(第6図)

調査区はほぼ遺跡の中央西よりに位置し、現在の岡中集落の南端付近、過去の調査で中世寺院が確認された地点から南へ約90mの地点である。すぐ南側には府道布施屋・貝塚線が東西に走り、西側には遺跡西限を区切る金熊寺川河道が蛇行しながら北西へと流れる。

### 2. 層位(PL. 6・14)

基本的な層序は、盛土の直下に茶灰色土がみられ、これより下層になると、混入している礫の粒径の差や砂質であること等の差異はあるものの、基本的に茶灰色系の含礫土及び礫層となる。各層はおおむね緩やかに北へ傾斜するように堆積している。

また、トレンチ底部付近の礫層は、下方に向かうほど砂が多くなる。一部では、湧水を伴う砂層が露出する部分もみられた。この状況から、金熊寺川の営力により形成された堆積層であることはまちがいないものと思われる。

当調査区の各層からはまったく遺物は出土しなかったほか、遺構も確認できなかった。

#### 第4節 89-3区の調査

##### 1. 位置（第6図）

調査区は遺跡の西部、ちょうど現在の岡中集落の西縁付近に位置している。金熊寺川が形成した河岸段丘の上部縁辺に立地し、これより西側は約1m程の落差を伴う段丘崖となっていく。

##### 2. 層位（PL. 6・15）

当調査区の層序は、上から耕土・床土層、旧耕土・床土層があり、灰褐色土、黄褐色土、そして地山である灰色砂礫層へと続いている。各層はほぼ水平な堆積をみせている。

地山直上層である黄褐色土を切り込んでいる落込みが認められた。落込みの埋土は黄灰褐色で、その下層にはうすく炭が堆積しているが、焼土は認められなかった。

以上の各層のうち遺物包含層は、灰褐色土と黄褐色土であるが、瓦器及び土師器細片が認められた他は遺物はほとんど出土していない。

#### 第5節 89-4区の調査

##### 1. 位置（第6図）

当調査区は過去の調査で発見された中世寺院から、南東へ約50mの地点である。この付近は集落の中心付近にあたり、遺構が集中している地点の一角である。しかし、これまでにおこなわれた調査は少なく、遺構の分布する範囲を明確にとらえることは今のところできてはいない。

## 2. 層位と遺物の出土状況（PL. 6・15）

調査区の大半は攪乱を受けていた。最上部の盛土と淡灰色土を取り除くと、すぐ遺物包含層が露呈する。上から黄褐色混じり灰色土、黄褐色土、暗灰色土と続いていく。ここまではほぼ水平堆積である。以下にはやや南に傾斜するように暗黄灰色砂質土、暗黄灰色土が認められる。ここまでの遺物包含層で、下層にはこぶし大の円礫を含む暗灰色砂質土、炭混じりの淡灰色粘質土、そして地山である暗灰褐色礫層へといたる。

遺物包含層には非常に多くの炭と、土師器極細片が含まれていた。しかし、土器片はすべてもろく風化していたため、取り上げは不可能だった。遺構は確認できなかった。

## 第5章 岡中西遺跡の調査

### 第1節 既往の調査

岡中西遺跡は昭和63年、信達岡中地内で行われていた府道の新設工事中に多量の中世土器群と石敷遺構が確認されたことにより、初めて遺跡として認識されることとなった。

緊急におこなわれた試掘調査により、石敷遺構、石積遺構、浅い谷状地形の一部、焼土坑、石組井戸等、中世に形成された遺構群を検出した。その後全面発掘調査がおこなわれ、掘立柱建物が発見された上、谷状地形を全掘した結果、人為的に埋め立てられ整地されたのち石積遺構が構築されていたことなどが確認された。

また、遺物の面からも、13世紀と14～15世紀の2時期に出土量のピークが認められること、多量に出土する「白色土師器」、井戸出土のまじない札を主とする木製品の存在、縄文時代の石匙出土等、市域でもこれまでに例をみない貴重なデータが得られている。

さて、以上のように、この調査により市域でも例のない遺構・遺物が確認されたわけだが、これ以降調査はまったく行われておらず、その広がり等は分布調査から得られる情報以外は、まったく不明といわざるをえない状況である。

### 第2節 90-1区の調査

#### 1. 位置（第6図）

調査は岡中集落内を通る旧熊野街道と、府道布施屋・貝塚線とが合流する交差点付近でおこなわれた。遺跡の西部にあたり、南側の丘陵から北に派生する低い尾根のちょうど先端付近に位置している。

#### 2. 層位（PL.6）

以前に建築物があったとのことで、厚い盛土がほどこされていた。これを取

り除くと、すぐに礫を含む黄白色粘土が露呈した。周辺の丘陵地で普遍的に認められる地山であること、周囲の田畑耕作面は検出された地山上面よりもさらに1 m程低いことから、当地は南から伸びていた丘陵尾根先端を削平し、つくられた平坦地であることが予想される。遺物・遺構は確認できなかった。

## 第6章 岡田遺跡の調査

### 第1節 既往の調査

これまで市域の東を流れる榎井川左岸流域では、遺跡の分布は最近まで上流域の洪積段丘中位面上に限られていた。しかし、近年の開発の増加にともない、この地の洪積段丘低位面一帯で多くの遺跡が発見されている。しかし、ほとんどの遺跡について調査はさほど行われておらず、わずかに中近世の遺物散布が知られるのみだった。

このような周囲の状況の中、岡田遺跡では今日まで数件の調査が行われており、中世特に室町期の遺物包含層が確認されてきた。また、すぐ西側に展開する岡田西・氏の松の2遺跡では、中近世の集落や水路等が確認されているほか縄文土器の散布も確認されており、この洪積段丘上低位面上において比較的古い段階より生活活動が営まれてきた可能性を示している。

また、90-3区では二次的な移動をさほど受けていないと思われる弥生時代の石鏃が出土したほか、古代に遡る須恵器片が発見されるなど、当遺跡でも、これまで知られていた中世・室町期より大きく遡る時代にヒトが住み着いていたことを示す結果となった。この遺物は現在整理中のため、別の機会に詳細を報告したいと思う。

### 第2節 90-1区の調査

#### 1. 位置(第7図)

調査区は遺跡の中央付近に位置しており、地形分類上は緩やかに北へ向かって傾斜する洪積段丘低位面上に立地する。ちょうど新設された市道中小路・岡田・樽井線と岡田集落の中間付近に当たる地点で、周辺の現況は水田である。これより西側には広く段丘面が広がり、先述の氏の松・岡田西遺跡などが展開していく。これらの榎井川左岸下流域の遺跡群はすべてこの段丘面上に位置している。遺跡群の西端は南北に走る開析谷でくぎられる。





第7図 岡田遺跡調査区位置図

## 2. 層位 (PL. 6)

調査区の現況はやはり周囲と同じく水田であった。耕土を取り除くと暗黄灰色土の床土が露出し、この下層には礫を含む黄灰白色粘土がみられた。調査区全体に3カ所のトレンチを設定したが、皆同じ状況であった。

耕作面を周囲の田畑と比べても若干低い位置になるため、大きく削平されていることが推定された。この事について現地の古老にうかがうと、以前近くにあったレンガ工場が、この畑から粘土を買い取り、当調査区では約60cm程掘り取られたとのことである。

この結果、当調査では遺構はもちろん、遺物包含層すら確認できなかった。

## 第7章 まとめ

平成2年度は、文化財保護法にもとづく埋蔵文化財包蔵地での発掘届出及び通知は、これまでに（平成3年2月）64件提出されており、前年比1.5倍と言う伸び率をみせた昨年度とほぼ同数にならんとする勢いである。ここ数年来、開発増加に伴う文化財調査件数の伸びも同様に急増の一途をたどっている。

こうした状況のもとで、今年度も市内の遺跡群において計23カ所の発掘調査を行いその記録保存と内容究明に努めた。その内訳は、第2表に記したとおり、男里遺跡12カ所、幡代遺跡2カ所、岡中遺跡2カ所、岡中西遺跡1カ所、岡田遺跡3カ所である。ほとんどが個人住宅を建設を中心としたもので、調査面積はさほど大きくはない。

なお、本書においては、前年度未報告分の岡中遺跡2カ所（89-3・4区）についても併せて掲載している。この成果も含め、以下順をおって説明していくこととする。

今年度、男里遺跡では発掘調査を12件おこなった。

90-3区では寺院境内地での調査となったため、中世寺院遺構の存在が期待されたが、調査の結果予想に反し遺構はまったく確認できなかった。しかし、ここでは自然堤防形成以前に存在した旧河道の存在が明らかになった。

90-4区からは、縄文土器片が出土し、二次的な移動を受けているものの、この時期の遺物分布範囲を新たに知ることができた。

90-7区では柱堀方・土坑・溝を多数確認することができた。残念なことに遺物の出土は圧倒的に少なく、わずかに1点出土した7世紀の杯蓋から辛うじて遺構の時期を確認できる程度であった。しかし、柱堀方の規模・形状はこれまでの経験から、大きく古代・中世の2群にグルーピングが可能となったうえ、一定の方向性をもちながら並んでいる様子が確認された。このことから古代・中世の建物群が至近に存在することが容易に想定できる結果となった。

一方、幡代遺跡では、今年度の2調査区で遺構群を確認することができた。

90-1区では、地山を掘り込んで作られた落込みが検出された。出土遺物から15世紀以降に埋没していることがうかがえる。この落込みが埋没したのちに、

石積が構築されている。この石積が崩壊した部分から瓦片が出土していることから、寺院に伴う何等かの遺構の可能性もあるが、断定はできない。この落込みと石積の関係については、両者にともなう遺物がなく、時間的な差は不明である。ただ、落込みと石積はどちらもほぼ東西に軸をそろえていることから、さほど時を隔てず構築されたものである可能性も否定できない。

また、この落込みの上部平坦面にはピットが検出されている。これも形状から中世の所産となるものであろう。ただし、先述の2遺構に時期的に併存するか否かは、不明であるといわざるを得ない。

この調査区では、平安後期に遡る平瓦片も出土しており、ごく近い位置に同時期の瓦葺建物が存在することを強く匂わせている。

90-2区ではピットと落込みを検出した。ピットは柱穴を伴わないため、掘立柱建物の柱堀方かどうかはわからないが、密集して検出された様子から、落込み同様に、トレンチ外に広がっていく可能性も考えられる。

当調査区の包含層から出土した遺物は、図化に耐えない細片ばかりだったが、おおむね14世紀を中心とする年代があたえられるものであった。

以上幡代遺跡では、今年度の調査によって、新たに遺構分布が拡大することが確認された。

岡中遺跡の今年度の調査では残念ながら、遺構・遺物ともにおおくを語り得る資料は得ることができなかった。だが、各々の調査結果をいま一度再評価してみたい。

まず、90-1区で確認された黒褐色土に注目したい。これを中心とする層序は、過去に遺跡の中央北端で行われた88-3区のものとも共通する部分がおおく、出土物の多寡はあるものの、両調査区の層序は基本的に同一と考えられる。この事は、これまで包含層の範囲が判明していない当遺跡の広がりを知る上で貴重なデータとなるといえる。

90-2区では、灰色を基調とする厚い砂礫層が確認できた。これより上位には遺物包含層は認められなかった。この事は、当地が中世の段階ではまだ開発されていない可能性が高いことを示している。

これとは逆に89-3・4区では、礫層より上位に包含層が認められた。このこ

とから両調査区周辺では、中世の段階から開発が行われている可能性を指摘できよう。岡中遺跡では金熊寺川の氾濫により堆積したされた礫層は、普遍的に確認されてきているが、これまで一部では中世の段階で氾濫原の礫層上に遺構が出現し始めることが判明している。今年度の各調査区では、今後氾濫原開発の過程を調査していくうえでの、層序的な基礎資料が得られたといえよう。

岡中西遺跡では新規発見時の調査以来、発掘調査が行われる機会はなかった。今年度ようやく行われた調査では、遺跡の西部にかけて存在した丘陵尾根の痕跡を確認することができた。この尾根は、これまで岡中西遺跡内で検出されている谷状地形と平行して北方向に伸びている。いいかえれば、南側山塊から北に派生する小丘陵の東側に存する谷状低地に岡中西遺跡は立地していたことになる。丘陵が削平されてしまった現在、確認する方法はないが、この尾根が遺跡の西限を画していたと思われるのである。

このように今年度の調査では、積極的に確定できる要素はないものの、遺跡の範囲を推定できるデータが得られた。岡田遺跡では今年度3件の発掘調査をおこなった。現在整理中の2調査区では遺構が確認されたほか、遺物も多く出土している。中でも90-3区ではこれまでに弥生時代石鏃や、古代須恵器等が確認されている。

この事は近年来、新規発見が相次いでいる檜井川流域の諸遺跡群の中でも特筆すべき情報である。これまで、上流域の洪積段丘中位面上に展開する遺跡群の開発時期が古代に求められる可能性があることが指摘されていたにとどまっていたが、今年度の調査成果は下流域の低位段丘面はより古くから「開発」されていた可能性があることを示唆している。

以上のように、今年度も発掘調査を通じて、市域の歴史情報収集に努めてきた。やはり各調査の規模は小さく、ある意味で遺跡内の点的な情報ばかりを集積しているわけだ。しかし、過去10年におよぼんとする「点の集積」は、徐々に「面」としてあるいは「空間」として我々の前に当時の姿を表しつつある。

これからも、小規模調査の積み重ねによるデータ蓄積をどん欲に重ねることから、各遺跡の内容追求を心がけていくことを心に念じ、報告の終わりとしたい。

第5表 文化財一覽表

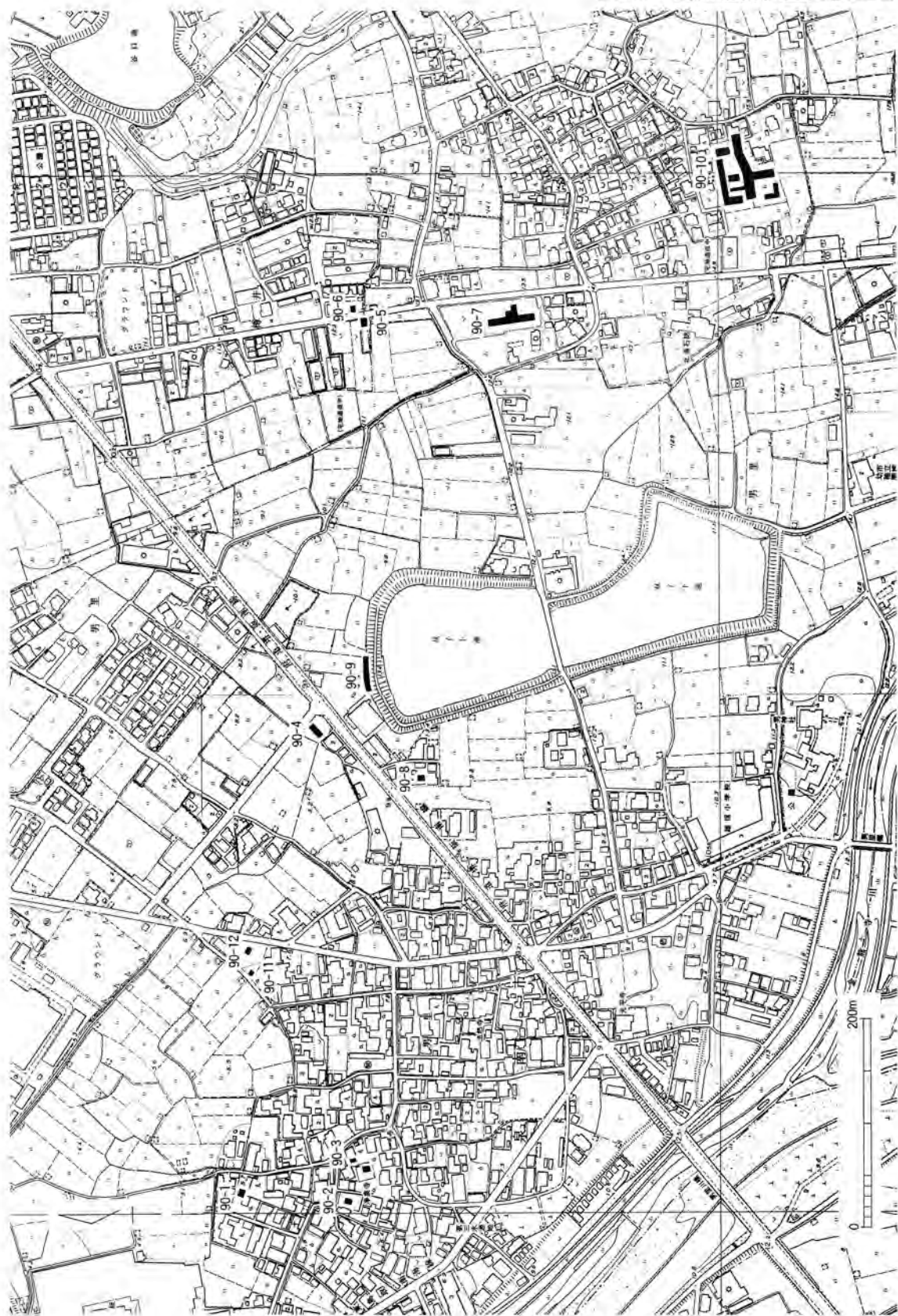
1	千石堀城跡	41	大坪遺跡	81	羽倉崎東遺跡	121	岩の前遺跡	161	林昌寺瓦窯跡
2	白地谷遺跡	42	宮の前遺跡	82	羽倉崎遺跡	122	中の川遺跡	162	岡中遺跡
3	正法寺跡	43	市堂遺跡	83	嘉祥寺神社本殿	123	池尻遺跡	163	岡中西遺跡
4	大谷池遺跡	44	北之前遺跡	84	羽倉崎上町遺跡	124	新家遺跡	164	雨山南遺跡
5	大久保 B 遺跡	45	野々宮遺跡	85	船岡山遺跡	125	下村遺跡	165	幡代南遺跡
6	紺屋遺跡	46	総福寺天満宮本殿	86	岡本庵寺	126	下村北遺跡	166	奥ノ池遺跡
7	降井家書院	47	垣外遺跡	87	田尻遺跡	127	川原遺跡	167	幡代遺跡
8	降井家屋敷跡	48	屯田遺跡	88	夫婦池遺跡	128	岡田遺跡	168	前田池遺跡
9	大久保 A 遺跡	49	八王子遺跡	89	船岡山南遺跡	129	氏の松遺跡	169	長山遺跡
10	中家住宅	50	慈眼院金堂・多宝塔	90	樗井西遺跡	130	岡田西遺跡	170	山ノ宮遺跡
11	東門寺遺跡	51	日根神社遺跡	91	藤波遺跡	131	座頭池遺跡	171	男里遺跡
12	小垣内遺跡	52	西ノ上遺跡	92	道ノ池遺跡	132	中小路西遺跡	172	光平寺跡
13	金剛法寺跡	53	土丸遺跡	93	岡ノ崎遺跡	133	中小路北遺跡	173	光平寺石造五輪塔
14	久保城跡	54	笹ノ山遺跡	94	中葛蒲遺跡	134	中小路遺跡	174	戎畑遺跡
15	甲田小春家住宅	55	土丸南遺跡	95	岸ノ下遺跡	135	北野遺跡	175	天神ノ森遺跡
16	五門北古墳	56	雨山城跡	96	樗井城跡	136	坊主池遺跡	176	キレット遺跡
17	五門遺跡	57	土丸城跡	97	奥家住宅	137	中小路南遺跡	177	高田遺跡
18	五門古墳	58	下大木遺跡	98	諸目遺跡	138	仏性寺跡	178	高田山古墳群
19	大浦中世墓地	59	大木遺跡	99	椽ノ塚古墳	139	大苗代遺跡	179	雨山遺跡
20	鳥羽殿城跡	60	中大木遺跡	100	禪興寺跡	140	海常宮池遺跡	180	平野寺(長楽寺)跡
21	米迎寺	61	稲倉池北方遺跡	101	ダイジョウウ寺跡	141	一丘神社遺跡	181	皿田池古墳
22	山ノ下城跡	62	鏡塚古墳	102	三軒屋遺跡	142	既戸王子跡	182	神光寺(蓮池)遺跡
23	墓の谷遺跡	63	川原遺跡	103	上之郷遺跡	143	海会寺跡	183	三味谷遺跡
24	池ノ谷遺跡	64	向井山遺跡	104	下村1号墳	144	市場遺跡	184	三升五合山遺跡
25	成合寺遺跡	65	梨谷遺跡	105	下村2号墳	145	向井山遺跡	185	石田山遺跡
26	山出遺跡	66	母山遺跡	106	新家オドリ山遺跡	146	上村遺跡	186	井関遺跡
27	湊遺跡	67	母山近世墓地	107	新家オドリ山東遺跡	147	狐池遺跡	187	岩崎山遺跡
28	壇波羅密寺跡	68	棚原遺跡	108	新家オドリ山南遺跡	148	上野中道遺跡	188	寺田山遺跡
29	壇波羅遺跡	69	向井池遺跡	109	新家古墳群	149	芋畑遺跡	189	自然田遺跡
30	佐野王子跡	70	意賀美神社本殿	110	フキアゲ山西遺跡	150	石ヶ原遺跡	190	玉田山古墳群
31	上町東遺跡	71	向井代遺跡	111	引谷池窯跡	151	高倉山東遺跡	191	玉田山遺跡
32	若宮遺跡	72	机場遺跡	112	フキアゲ山東遺跡	152	本田池遺跡	192	玉田山須恵器窯跡
33	上町遺跡	73	日根野遺跡	113	フキアゲ山1号墳	153	上代石塚遺跡		
34	市場東遺跡	74	郷之芝遺跡	114	フキアゲ山2号墳	154	信之池遺跡		
35	中嶋遺跡	75	植田池遺跡	115	兎田古墳群	155	滑瀬遺跡		
36	岡口遺跡	76	長籠遺跡	116	兎田遺跡	156	六尾遺跡		
37	小塚遺跡	77	安松遺跡	117	別所遺跡	157	六尾南遺跡		
38	十二谷遺跡	78	末廣遺跡	118	別所北遺跡	158	金熊寺遺跡		
39	丁田遺跡	79	中間遺跡	119	高野遺跡	159	林昌寺銅鑼出土地		
40	新池尻遺跡	80	松原遺跡	120	昭和池遺跡	160	林昌寺跡		

# 版 図

PL.1 泉南地域の文化財

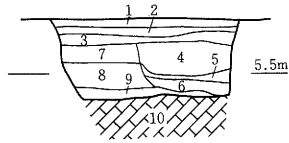


PL.2 男里遺跡調査区位置図



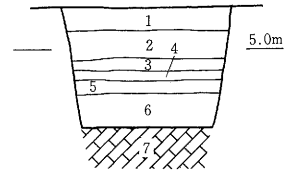


PL.3 男里遺跡調査区



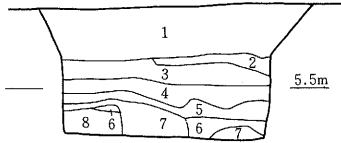
- |            |          |
|------------|----------|
| 1 盛土       | 6 暗灰色砂   |
| 2 暗灰色土     | 7 暗黄灰色土  |
| 3 暗灰黄色土    | 8 暗茶灰色土  |
| 4 円礫混じり灰色砂 | 9 暗灰褐色土  |
| 5 暗黄灰色砂質土  | 10 暗灰褐色礫 |

ON90-2区 東壁断面図



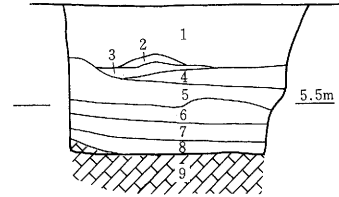
- |        |            |
|--------|------------|
| 1 盛土   | 5 灰色混じり褐色土 |
| 2 淡灰色土 | 6 黄灰色土     |
| 3 灰白色土 | 7 灰褐色砂質土   |
| 4 灰褐色土 |            |

ON90-1区 北壁断面図



第2トレンチ 西壁

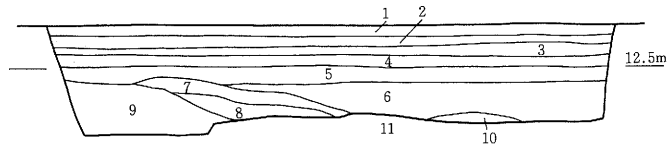
- |               |            |
|---------------|------------|
| 1 盛土          | 5. 淡黄褐色シルト |
| 2 黄色粘土混じり暗灰色土 | 6 灰褐色シルト   |
| 3 炭混じり暗灰色シルト  | 7 暗青灰色シルト  |
| 4 黄褐色混じり灰色シルト | 8 淡褐色砂礫    |



第1トレンチ 西壁

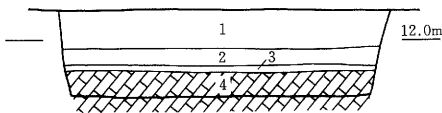
- |              |                |
|--------------|----------------|
| 1 盛土         | 6 黄褐色混じり淡灰色砂質土 |
| 2 灰色砂質土      | 7 灰色混じり黄褐色土    |
| 3 黄灰色砂質土     | 8 灰色混じり黄褐色シルト  |
| 4 黄褐色混じり灰色土  | 9 青灰色砂礫        |
| 5 褐色混じり灰色砂質土 |                |

ON90-3区 断面図



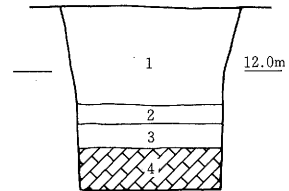
- |            |           |
|------------|-----------|
| 1 暗灰色土(耕土) | 7 黒褐色土    |
| 2 黄色土(床土)  | 8 淡灰褐色砂質土 |
| 3 淡灰色土     | 9 淡黄灰色砂質土 |
| 4 暗黄灰色粘土   | 10 灰色礫    |
| 5 黄色粘土     | 11 暗灰褐色粘土 |
| 6 淡黄灰色砂質土  |           |

ON90-4区 北壁断面図



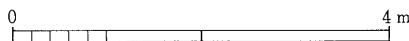
- |             |
|-------------|
| 1 盛土        |
| 2 暗灰色土(耕土)  |
| 3 暗黄灰色土(床土) |
| 4 暗赤褐色礫     |

ON96-6区 北壁断面図

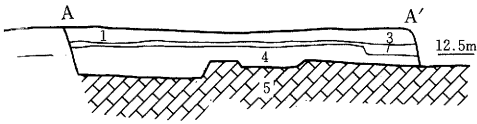


- |          |
|----------|
| 1 盛土     |
| 2 暗灰色土   |
| 3 黒褐色土   |
| 4 黄灰色含礫土 |

ON90-5区 北壁断面図

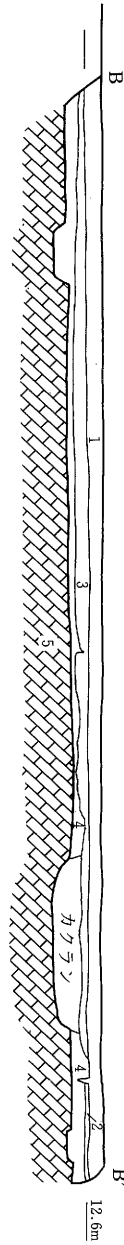


拡張部 東壁断面図

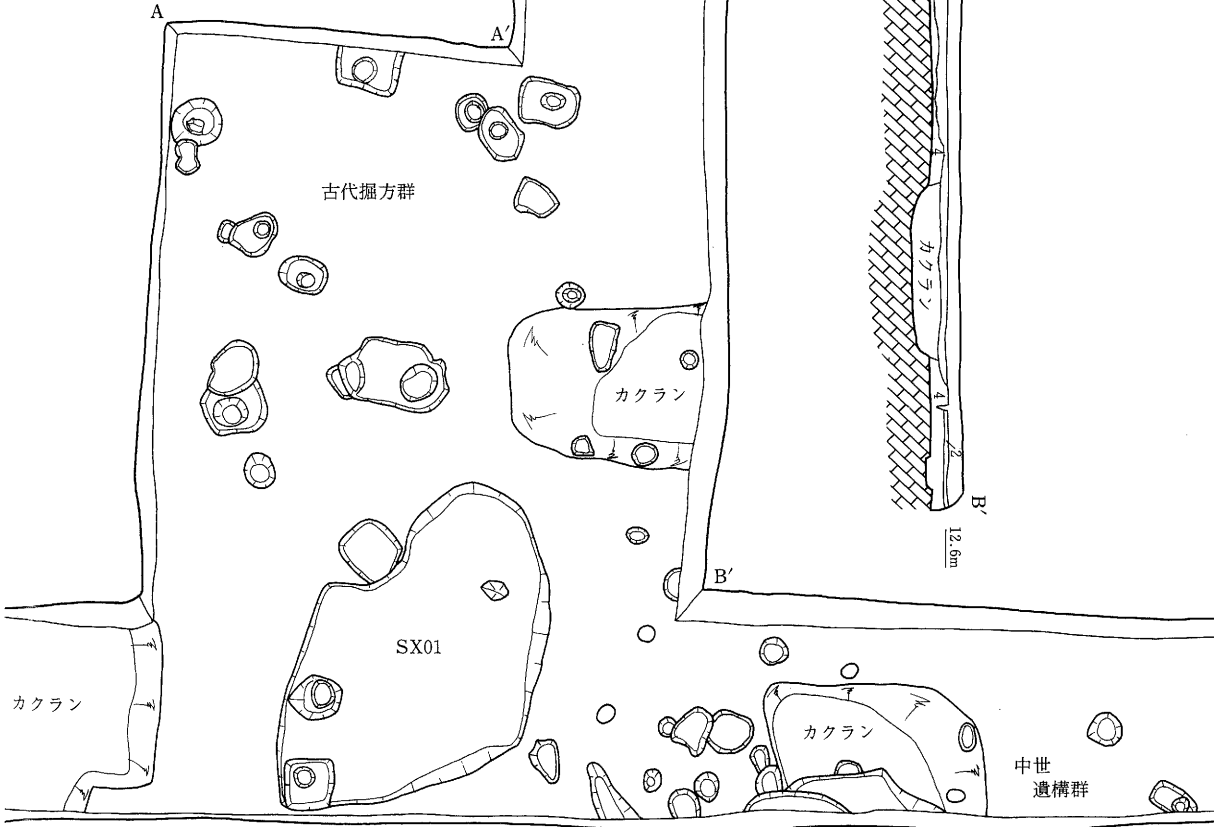


- 1 暗灰色土
- 2 淡灰色土
- 3 淡灰色砂
- 4 暗褐色土
- 5 黄灰色粘土

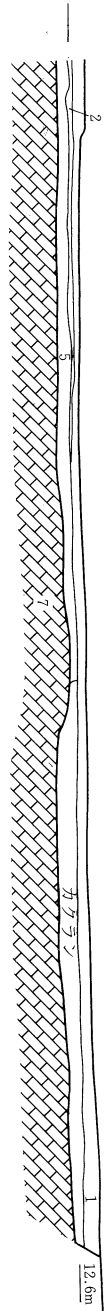
拡張部 南壁断面図



拡張部  
遺構平面図

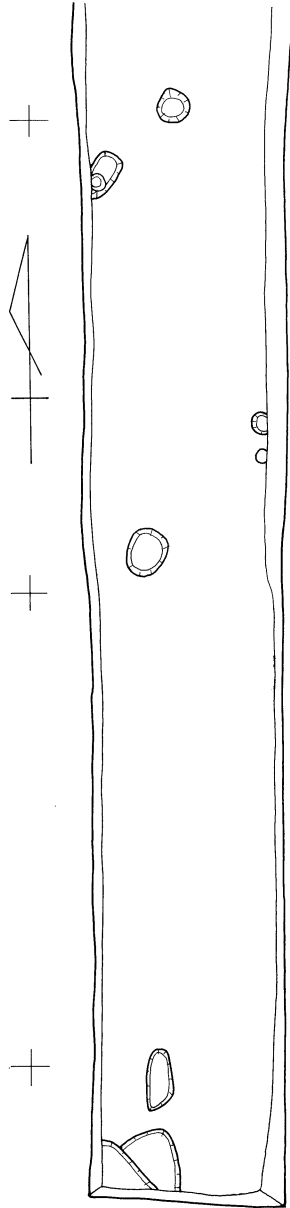


PL.5 男里遺跡90-7区遺構図および断面図②

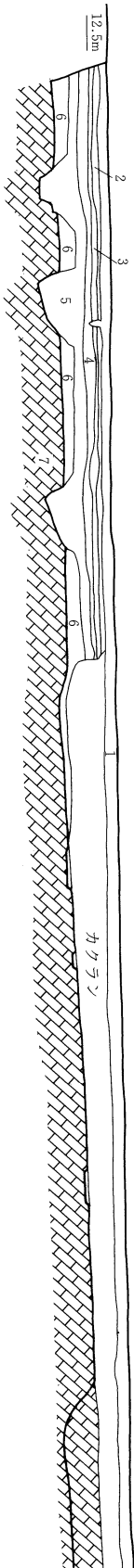


調査区南区平面図および断面図

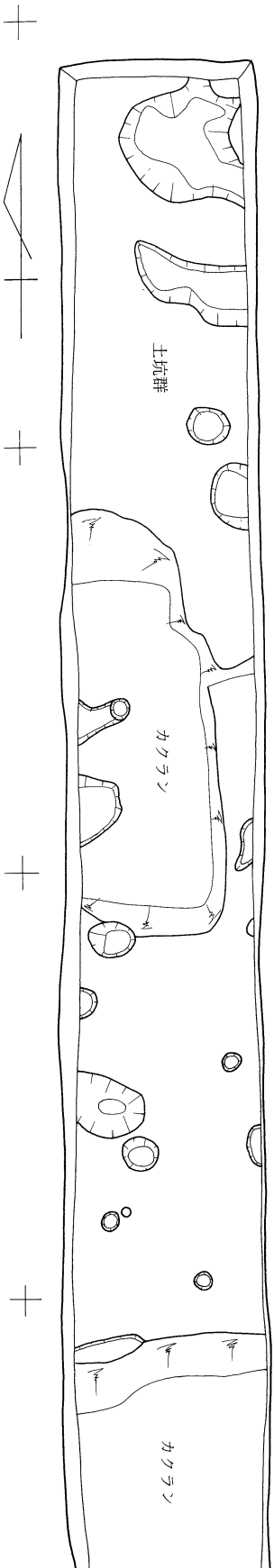
- 1 暗灰色土
- 2 淡灰色土
- 3 橙褐色混じり淡灰色土
- 4 淡褐色混じり灰色土
- 5 暗褐色土
- 6 黄灰色粘質土
- 7 黄灰色粘土



トレンチ南半



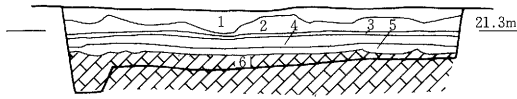
調査区北区平面図および断面図



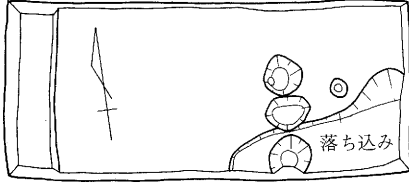
土坑群

カクラン

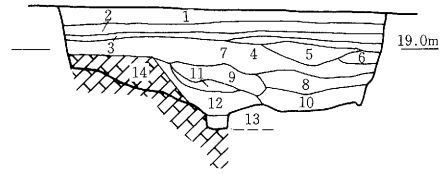
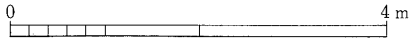
カクラン



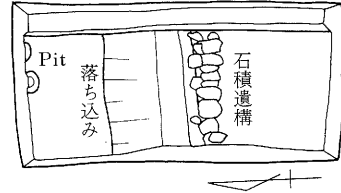
- 1 盛土
- 2 暗灰色土(耕土)
- 3 茶褐色土(床土)
- 4 灰褐色砂質含礫土
- 5 暗黄灰褐色土
- 6 黄灰色粘土



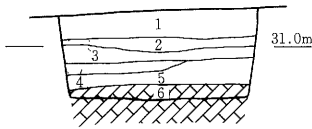
HT90-2区 平面図および断面図



- 1 盛土
- 2 暗灰色土(耕土)
- 3 黄茶色土(床土)
- 4 淡黄灰色粘土
- 5 礫混じり淡黄灰色土
- 6 暗灰色礫
- 7 淡茶灰色土
- 8 灰褐色粘土
- 9 暗茶灰色土
- 10 灰色粘土
- 11 灰褐色土
- 12 灰色粘土混じり黄褐色粘土
- 13 暗黄褐色粘土
- 14 黄灰色粘土

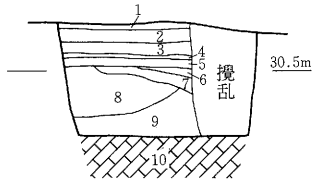


HT90-1区 平面図および断面図



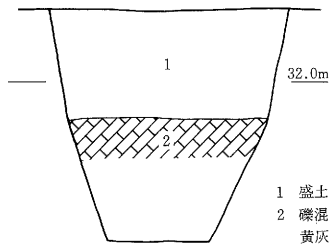
- 1 盛土
- 2 茶灰白色土
- 3 礫混じり茶灰色砂
- 4 淡茶灰色砂
- 5 暗茶灰色礫
- 6 暗灰色礫

OK90-2区 北壁断面図



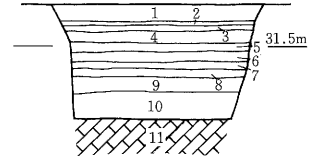
- 1 盛土
- 2 淡灰色土
- 3 黄灰色混じり灰色土
- 4 黄褐色土
- 5 暗灰色土
- 6 暗黄灰色砂質土
- 7 暗黄灰色土
- 8 暗灰色砂礫
- 9 淡灰褐色粘質土
- 10 暗灰褐色礫

OK89-3区 南壁断面



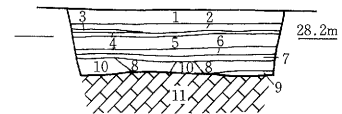
- 1 盛土
- 2 礫混じり黄灰白色粘土

OKW90-1区 東壁断面



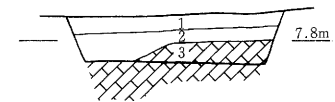
- 1 暗灰色土(耕土)
- 2 黄色土
- 3 灰黄色土
- 4 黄灰色土
- 5 暗黄灰色土
- 6 淡黄灰色土
- 7 黄色粘土
- 8 褐色混じり暗灰色土
- 9 黒褐色土
- 10 灰褐色粘砂土
- 11 暗灰色礫

OK90-1区 北壁断面図



- 1 盛土
- 2 灰色土
- 3 褐色混じり灰色土
- 4 黄色粘土
- 5 淡灰褐色土
- 6 黄灰色土
- 7 灰褐色土
- 8 黄灰褐色土
- 9 炭層
- 10 黄褐色土
- 11 灰色砂礫

OK89-3区 北壁断面図



- 1 暗灰色土(耕土)
- 2 暗黄灰色土
- 3 黄白色粘土

OKD90-1区 東壁断面図





90-1区 (東から)



90-2区 (南から)





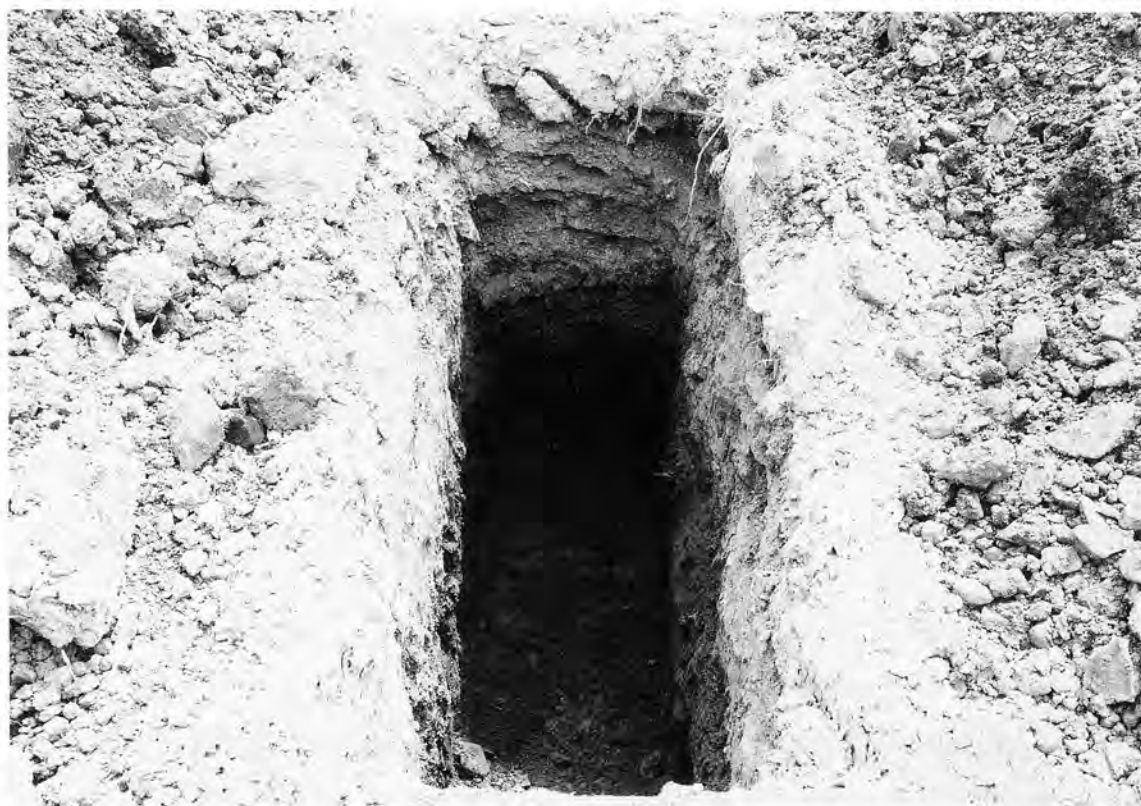
90-3区第1トレンチ (南から)



90-3区第2トレンチ (南から)



90-4区 (西から)



90-5区 (東から)



90-6区 (東から)





全景 (北から)



同上 (南から)



拡張区 (東から)



同上 (西から)



90-1区 (南から)



90-2区 (西から)

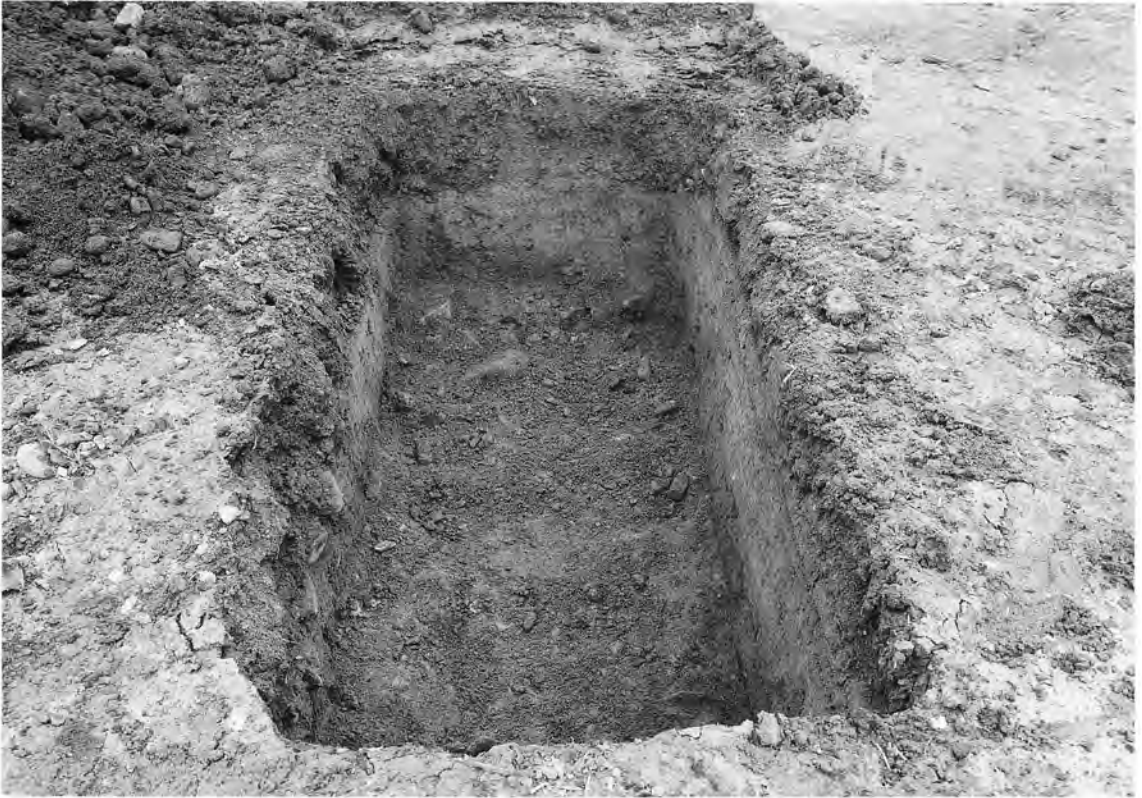




90-1区 (東から)



90-2区 (南から)



89-3区 (北から)



89-4区 (北から)

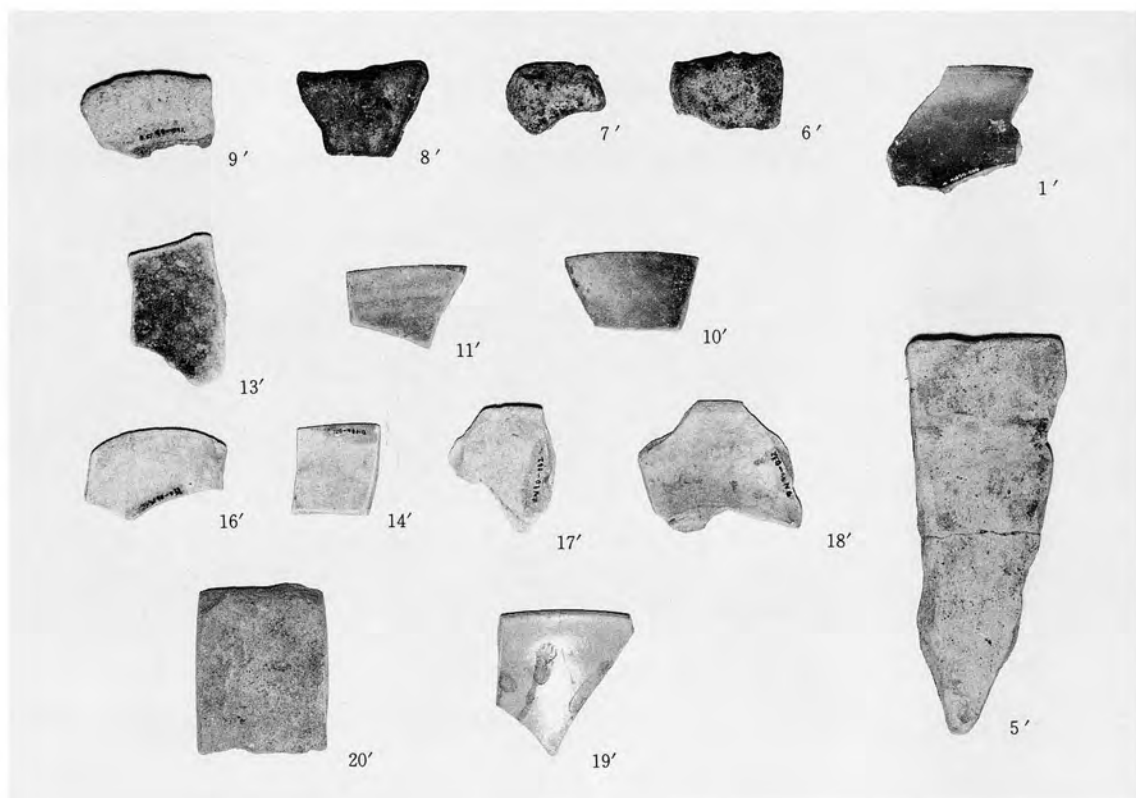
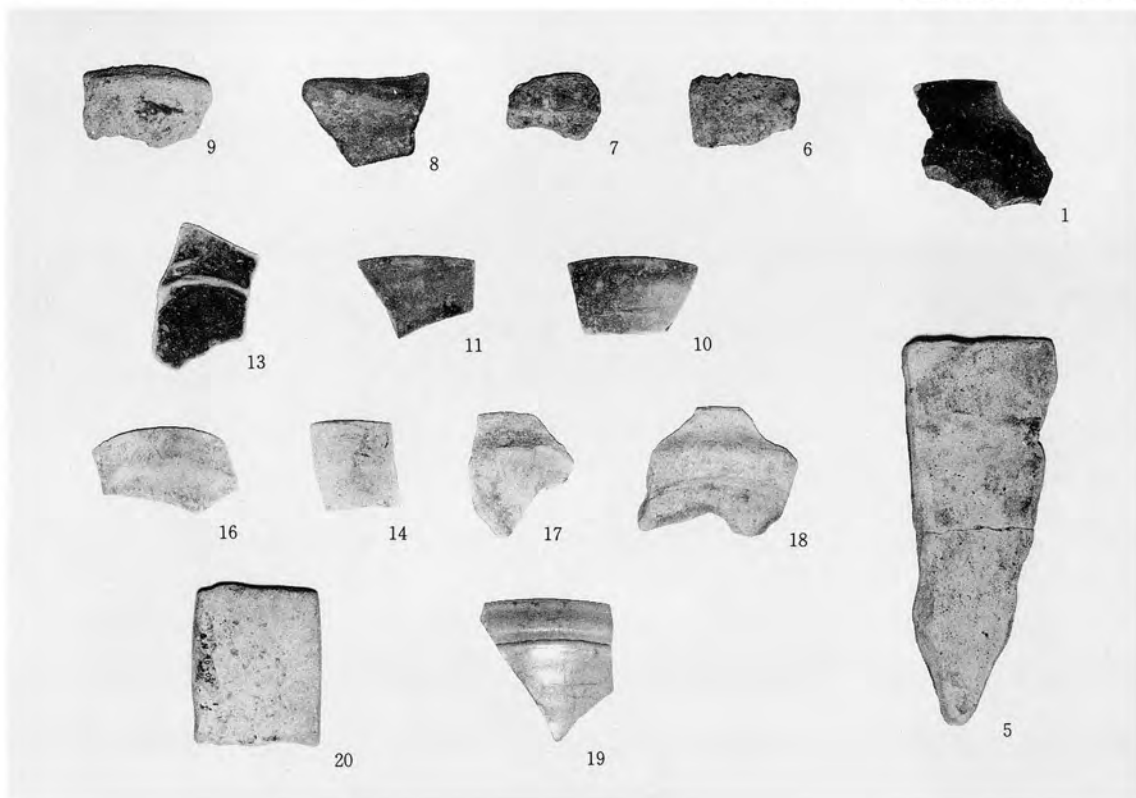


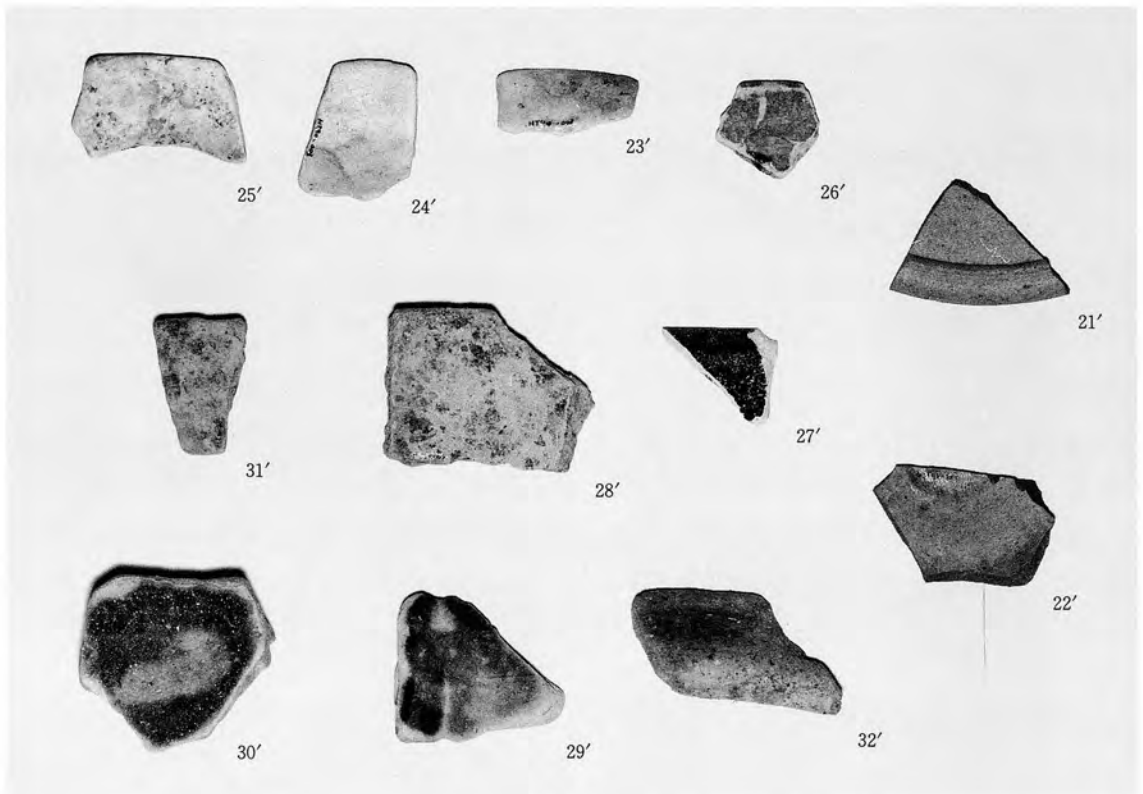
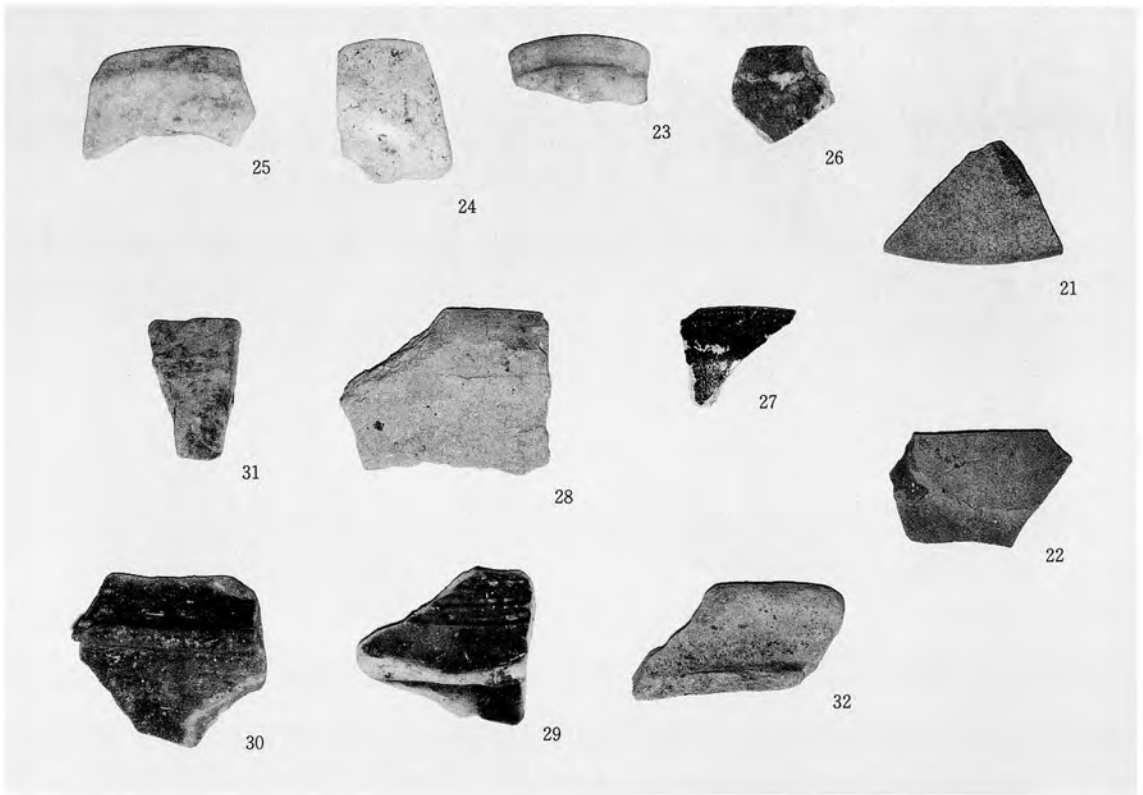
OKW90-1区 (北から)



OKD90-1区 (北から)











33



34



33'



34'



